

山形県埋蔵文化財調査報告書第8集

# 小林遺跡

## 発掘調査報告書

財団法人  
山形県埋蔵文化財センター



6-1990-577-01

山形県教育委員会

1990
577
6



090-577

野尻侃

山形県東根市

小林遺跡 昭和50年度  
発掘調査報告書

昭和51年3月

# 序

小林遺跡は、はるか縄文の昔から断続的に営まれてきた県下屈指の大規模な遺跡であります。

古くより考古学研究のフィールドとなり、縄文前期（A地点）・縄文中期（B地点）平安中期（C遺跡）の三つの集落跡が確認されております。

遺跡は県内において著名な大扇状地（乱川扇状地）の中央部にあって延々と続くりんごたばこの畑に覆われていました。

ところが、この地域にも、時代の要請をうけて緑の中に工業団地をつくるという「農村地域工業導入促進法」にもとづく、東根大森工業団地が造成されることになりました。

このような遺跡が開発の波をかぶることは大変残念なことでありますが、この地域は県内有数の工業開発地域としてのポテンシャルティを有することから、やむなく地元東根市教育委員会と共に県開発局、東根市開発公社と協議し、調整を図った結果、つぎの点で合意に達し、発掘調査を実施することとなったものであります。

- (1) 小林A地点は、予備調査を実施し、それにもとづいて保存を検討する。
- (2) 小林B地点・C遺跡は、発掘調査を実施して記録保存措置をとる。
- (3) 調査は文化財保護側で行い、その経費は開発側で負担する。

これにもとづいて、昭和49年度に東根市教育委員会がA地点の予備調査とC遺跡の発掘調査を実施し、その結果A地点の約半分を工業団地地域内にそのまま保存することができました。

県教育委員会は以上のあとをうけてA地点の残り半分とB地点の発掘調査を昭和50年度に行うこととしたものであります。

本報告書は、その成果の概略をとりまとめたものであります。今なお吟味検討すべきことも多く、充分ではありませんが、遺跡の保護・考古学研究等に御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、ご指導くださった柏倉亮吉・川崎利夫両先生、ご協力をいただいた東根市教育委員会・市開発公社等の皆さんに厚く感謝の意を表したいと思います。

昭和51年3月

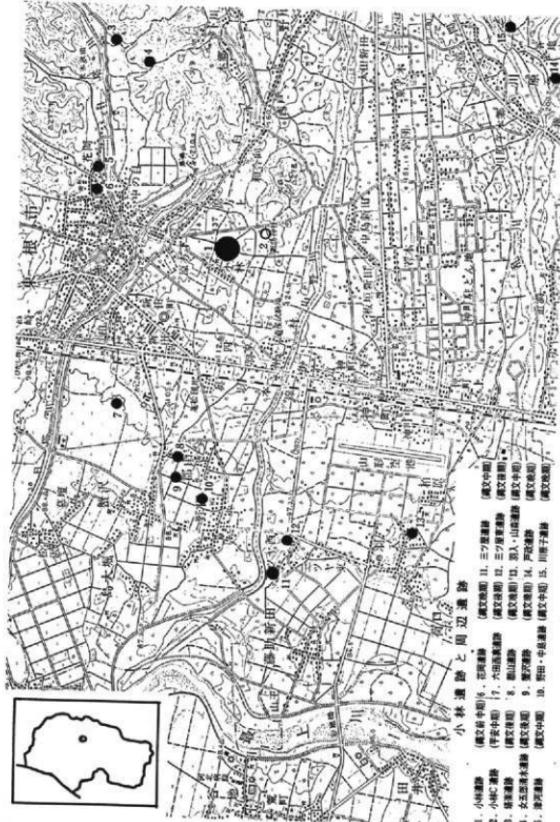
山形県教育委員会

教育長 赤星武次郎

# 例　　言

- 1 本報告書は山形県教育委員会が、昭和50年度に実施した、東根市大森工業団地造成に係る緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和50年6月30日から10月15日までの延85日間に行なわれた。
- 3 実測図は石器：2分の1を原則とし、拓影図はすべて3分の1とし、それぞれにスケールを示した。また、挿図中の記号でJ—住居跡・F—炉・P—土壙　柱穴は数字で示した。  
なお、土層図中の土器・石器を明示するために、それぞれをP（土器）・S（石器または石片）とした。
- 4 調査は調査委員会を設置し、その協議の結果にもとづいて実施した。
- 5 調査体制はつぎの通りである。

調査委員	柏倉亮吉（山形大学名誉教授）・川崎利夫（天童市立第四小学校教諭）
調査員	佐藤鎮雄・佐藤正俊・野尻 侃・名和達朗（県教育庁文化課技師）
調査補助員	石坂 茂（明治大学生）・大類 誠（立正大学生）・長沢礼子 原田浩二・中村恭子・舟山義彦・石田 肇（以上山形大学生）
- 6 土層の地質分析については山形県立博物館学芸員菅井敬一郎氏に依頼した。また、東北大学教授庄子貞雄氏に御助言を賜った。歯骨の鑑定については、山形県立博物館高橋多蔵氏に御教示を賜った。
- 7 本報告書の作成にあたっては、佐藤鎮雄・佐藤正俊が担当し、執筆した。編集は、野尻 侃が担当した。実測図作成の一部について名和達朗が担当した。また、実測図作成について中嶋 寛（東南村山福祉事務所主事）・秦 昭繁（置賜考古学会会員）・長沢礼子・伊藤悦子・安食英司・中村恭子・舟山義彦・板垣知明の諸君の協力を得た。



## 目 次

I 調査の経緒	1
調査に至る経過.....	1
調査の経過.....	3
II 遺跡の概観	
遺跡の立地.....	8
遺跡の層序.....	9
遺構の分布.....	13
遺物の分布.....	14
III 遺構と遺物	
(1) 遺 構.....	16
(2) 遺 物.....	47
IV 総 摘	63
付編 東根市小林遺跡の地質	67

## 挿図目次

第1図 位置図	4
第2図 全体図	7
第3図 地形図	9
第4図 土層図 (B地点)	11
第5図 遺構配置図 (B地点)	16
第6図 A地点 1号住居跡・1号土壤	17
第7図 A地点 1号住居跡・1～3号土壤出土土器	19
第8図 A地点 2号住居跡・2～3号土壤	20
第9図 A地点 2・2b号住居跡出土土器	21
第10図 A地点 2a号住居跡出土土器	

## 図版目次

第11図	A地点2a号住居跡出土土器	22
第12図	B地点1号住居跡	24
第13図	B地点2号住居跡出土土器	25
第14図	B地点2・5・7号住居跡	26
第15図	B地点3号住居跡	27
第16図	B地点3号住居跡出土土器	28
第17図	B地点4号住居跡	30
第18図	B地点4号住居跡出土土器	31
第19図	B地点5・6号住居跡出土土器	35
第20図	B地点6号住居跡	36
第21図	B地点6・7号住居跡出土土器	37
第22図	B地点各住居跡複式炉	38
第23図	B地点5・7・12・13・22・24~26号土壤	41
第24図	B地点1~3・27・37・39号土壤	43
第25図	B地点配石造構	44
第26図	B地点配石造構・列石造構出土土器	61
第27図	B地点列石造構出土土器	45
第28図	B地点各造構出土土器	46
第29図	A地点住居跡出土土器	55
第30図	A・B地点住居跡出土土器	57
第31図	A地点住居跡出土土器	59
第32図	B地点住居跡出土土器	60
第33図	B地点8~20グリッド柱状図	67
第34図	粘土鉱物(<Zpr>)のX線回折図(1)	70
第35図	粘土鉱物(<Zpr>)のX線回折図(2)	71
第36図	各処理後(<Zpr>)のX線回折図	72

図版1 B地点8~20グリッド土層断面

図版2 0.1~0.2mm鉱物の顕微鏡写真 第Ⅲ層

図版3 0.1~0.2mm鉱物の顕微鏡写真 第Ⅳ層

- 図版4 造跡近景 ▲A地点 ●A地点 ▼B地点
- 図版5 発掘風景 ▲A地点 2号住居跡 ●B地点 6号住居跡 ▼B地点 4号住居跡
- 図版6 ▲土層断面 ●土層断面 ▼遺物の出土状況
- 図版7 A地点 ▲1号住居跡 ●1号住居跡北側周辺 ▼2号住居跡発掘状況
- 図版8 A地点 ▲2号住居跡 ▼2号住居跡内床炉
- 図版9 A地点 ▲2号住居跡 ▼2号住居跡内配石
- 図版10 A地点土壤 ▲1号 ●2号 ▼3号
- 図版11 B地点 ▲2号住居跡 ●2号住居跡内複式炉 ▼2号住居跡
- 図版12 B地点 ▲3号住居跡 ●3号住居跡内複式炉 ▼3号住居跡遺物出土状況
- 図版13 B地点 ▲4号住居跡 ●4号住居跡覆土内遺物出土状況 ▼4号住居跡土壤
- 図版14 B地点4号住居跡遺物出土状況 ▲●▼
- 図版15 B地点 ▲6号住居跡 ●6号住居跡内複式炉 ▼6号住居跡内遺物出土状況
- 図版16 B地点 ▲5号住居跡 ●7号住居跡 ▼7号住居跡内複式炉
- 図版17 B地点 ▲配石造構 ●配石造構土層断面 ▼配石造構土層断面
- 図版18 B地点 ▲1~27・2・3号土壤 ●3号土壤土層断面 ▼5号土壤
- 図版19 B地点 ▲6~7号土壤 ●7号土壤遺物出土状況 ▼12~13~25~26号土壤
- 図版20 B地点 ▲12号土壤土層断面 ●17~18号土壤 ▼22号土壤
- 図版21 B地点 ▲34号土壤 ●24号土壤 ▼列石造構北部分
- 図版22 B地点 ▲列石造構北部分 ●列石造構北部分 ▼列石造構
- 図版23 A地点 ▲1号住居跡出土土器 ▼土壤出土土器
- 図版24 A地点 ▲2号住居跡出土土器 ▼2号住居跡出土土器
- 図版25 A地点 ▲2号住居跡出土土器 ▼2号住居跡出土土器
- 図版26 B地点 ▲2号住居跡出土土器 ▼2号住居跡出土土器
- 図版27 B地点 ▲3号住居跡出土土器 ▼3号住居跡出土土器
- 図版28 B地点 ▼4号住居跡出土土器 ▼4号住居跡出土土器
- 図版29 B地点 ▼4号住居跡出土土器 ▼5号住居跡出土土器

図版30	B地点	▲6号住居跡出土土器	▼6号住居跡出土土器
図版31	B地点	▲6号住居跡出土土器	▼7号住居跡出土土器
図版32	B地点	▲配石遺構出土土器	▼列石遺構出土土器
図版33	B地点	▲2号土壤出土土器	▼2号土壤出土土器
図版34	B地点	▲4号住居跡出土土器	◀配石遺構出土土器 ▶4号住居跡出土土製品
図版35	A地点出土石器		
図版36	A地点出土石器		
図版37	B地点出土石器		
図版38	B地点出土石器		

## I 調査の経緯

### 調査に至る経過

本遺跡は、山形県東根市大字東根字大森6441番地他に所在する。遺跡発見のきっかけは昭和34年4月当地区的用水路工事によって多量の遺物が見つかったことによる。昭和37年県遺跡分布調査による「山形県遺跡地名表」には「小林東遺跡（No466）鴨文前期集落跡」と登載されている。また本遺跡は地元研究者らによって幾度か調査されている。

昭和34～36年頃、加藤 稔は東根高校郷土研究部員と共に數度にわたり遺物採集を行っている（註1）。次に保角里志ら山形南高郷土研究部員は遺物採集を行い、加藤 稔・山形大学教育学部歴史学研究会学生の応援指導の下に、昭和43年8月31日・9月1日の二日間にわたる試掘調査を行っている（註2）。これに相前後して本間亮法等が遺跡を訪れており、こうした調査研究により、①亂川扇状地扇央部に立地し、乱川扇状地最古の遺跡である。②広範囲に遺物が豐富に散布し、多様で特徴ある土器（多様な鴨文前期土器の他に鴨文中期土器片と須恵器片も含めて）が出土する。③遺物の散布状況から環状の集落らしいこと。などが明らかにされている（註3）。

ところで同じく山形地理学会の東根市総合開発基礎調査が進められていたのである。昭和34年に東根市長の依頼を受けたものである（註4）。昭和45年刊行された報告書では、調査結果と東根工業団地造成の提言を述べている。開発の指針として農工一体論を軸にしたインダストリアルパーク構想によるものである。東根市では、これに加えて通産省の工業用地適地指定を受けていることもあって、この地域の工業団地造成にのりだしたのである。しかし、市独自の造成は難行し、県に引き継がれるのである。かくして東根大森工業団地（100ha規模）造成の計画は進行し、昭和48年には用地買収が開始されるに至ったのである。

こうした事態を憂慮し、県教育委員会では、市教育委員会と共に造成予定地内の埋蔵文化財保護のため分布調査を計画する一方、県・市の開発機関との協議を始めたのである。しかし、昭和48年度に予定した分布調査は、用地買取騒動のため実施できず延期された。翌昭和49年5月、一部の果樹園での抜根作業により遺跡は破壊の危機に直面したのである。そこで同年5月27日・6月6日の両日にわたって緊急に分布調査を実施したのである。その結果旧知の小林東遺跡に鴨文中期・平安中期の二遺跡が確認され、小林A・B・Cと呼称替えされた。さらにA地点が馬蹄形状の集落跡であることが推定され、改めて注目された。

この結果にもとづく関係機関の協議によって、①A地点は予備調査を実施し、保存の可否を明らかにする。②B地点・C遺跡は発掘調査を実施して記録保存措置をとる。③調査は教育委員会が行い、その経費は開発側が負担する。ということになった。

A地点の予備調査とC地点の発掘調査は、昭和49年7月～50年3月まで市教育委員会が実施した。調査期間約50日。発掘面積844m<sup>2</sup>。その成果は市教育委員会・小林遺跡調査団が発行した二冊の報告書に述べられている（註5）。

県教育委員会は、予備調査の結果にもとづきA地点の保存について県開発局と協議を行った。その結果、A地点の北側約 $\frac{1}{2}$ だけ保存されることになった。そこで市教育委員会と図って柏倉亮吉・川崎利夫両氏を含む関係者による小林遺跡調査委員会を設け、A地点の保存ならない部分7520m<sup>2</sup>と、B地点4320m<sup>2</sup>の発掘調査を実施することになった。調査は昭和50年6月30日より10月15日まで延85日間にわたって実施されたのである。

註1 加藤 徳 「考古学からみた東根市」 亂川原状地 山形地理学会編 昭和45年1月

註2 布川山形南高等学校考古学研究部 「考古学」 郡士研究誌 昭和43年度第15号同じく東根小林遺跡調査報告〔第二報〕 郡士研究誌 昭和44年度16・昭和45年度17合併号

註3 註1・註2の文献

註4 註1の乱川原状地

註5 東根市教育委員会・小林遺跡調査団「小林遺跡－縄文前期遺跡と平安時代墓葬跡－」 昭和50年3月

## 調査の経過

小林遺跡は、東根市教育委員会によって昭和48年にA地点の予備調査が行なわれている。その結果は、縄文時代前期の住居跡1・土壤・配石遺構が検出され、土器・石器が多量に出土している。時期は大木2a・2b式を主として、大木3 b式まで、縄文時代前期の集落跡の一部分が解明され、A地点における時期・性格・内容がある程度解明された。（註1）

こうした第一次調査の成果をふまえて、A・B両地点の発掘調査を昭和49年6月30日～10月15日の3ヶ月間に亘って行なわれた。今回は、A地点の南部東側の果樹畑が一部未買収のため、B地点より調査を開始した。

### B 地点

調査の方針は、昭和48年に分布調査が行なわれ、B遺跡の範囲として考えられ詳細な範囲は不明確であり、遺物の散布状況も散在的でそれ自体明確ではなかった。今回の調査はそれを含めて、B地点での範囲確認を1次作業として、遺構・遺物の検出状況から考え合せ、随時拡張して行く方針を取った。なお、B地点の道路西側は未買収地域である。

調査の方法は、グリッド法による遺跡全体の発掘調査を原則とした。グリッド原点は、遺跡の中央部を東西に横切る公認測量杭に置いて、15×23グリッド杭とした。グリッドの基線は等高線に沿って直交してX軸方向100m、平行させてY軸方向120mを設定し、2×2mを1単位とする方眼を推定範囲の全体に掛けた。X軸方向を東より1・2・3……50、Y軸方向を南より1・2・3……60と呼称し、Y軸方向はN=7'～Wを測る。

約3ヶ月間にわたる調査のため、調査の経過は1・2週間単位で記述する。

6月30日～7月12日

B地点の東部中央よりの微高地に、10mごとにキ字印状にグリッドを設定し、X-16列を2m置きに、東西Y-10・15・20・25・30・35・40・45・50列を10m間隔に、グリッド粗掘作業を北側から南側へと行う。その結果遺構は、21-10グリッドで暗褐色土の落ち込みが認められ、遺物の出土状態は、16-40・45・50グリッド内で地表下30～50cmで土器がまとまって出土し、さらに、16-15～35グリッドにおいても同様に認められた。土層の状態は、16-12～35グリッドにかけて、地表面下約35～40cmで黄褐色土に焼土の粒子が混り、90～110cmで黄褐色土の地山が認められ、第V層の黄褐色土の存在が不明確であった。さらに南側に粗掘り作業を行い、7月10日～12日にかけ各グリッドの精査作業を行う。西側の遺物の出土状況は希薄である。

7月14日～7月26日

先週からの結果から、X-6～15列、Y-13～35列の区域を拡張し、2mごとに交互に粗掘作業を行う。拡張区域南端では、遺構・遺物が検出されなかった。26-29-14-16



グリッドにかけて、第V層下部では列石遺構を検出し、8~15~30~35グリッドで、3・4号住居跡 5・6・7号土壙を確認し、さらに第VI層下部面まで掘り下げ（地表下70~80cm）、23日から26日にかけ、拡張区の精査追究作業を行い、各住居跡・土壙群・配石遺構の覆土上面における、平面プラン概形を確認し、各遺構の概略を明確にする。X-16列、Y-20・30列の土層を測図し、写真撮影を行う。

7月28日～8月9日

拡張区の北側に位置する、3・4号住居跡、5・6・7号土壙より検出作業に取りかかる。3号住居跡は、7月30日から8月7日まで調査を要し、4号住居跡は覆土から出土する。一括・完形土器および主な石器を柱状に残し掘り進めて行き、概略的な平面ドットを作製する。5・6・7号土壙は8月4日から6日まで調査し、5日から9日にかけて、3・4号住居跡の炉跡土層図を測図し、3号住居跡・5・6・7号土壙の全景を写真撮影する。

8月11日～8月14日

4号住居跡の検出作業を行ない、平面プラン・柱穴・壁構などが明確に検出された。拡張区中央部の精査追究作業をさらに行う。

7月18日～8月30日

引き続き4号住居跡の検出作業を行い21日に完掘する。さらに配石遺構は18日から20日まで検出・完掘を要し、1号住居跡・11・12・13・16・19・20・21・23・24・26号土壙の精査追究作業を行ない、28日にほぼ完掘する。その間各遺構の土層図を測図。28日から30日まで写真撮影を行う。なお北側に在る、3・4号住居跡・5・6・7号土壙の平面図の測図を一部26日より開始する。

9月1日～9月13日

7日には拡張区北側の測図作業を終る。1日から12日まで、6号住居跡の検出を行ない、覆土・床面直上の一括・完形土器を柱状に残し掘り進めて行き、土層図等・写真撮影を行なって12日に完掘する。1・2・3・4・14・15・17・18号土壙を調査する。9月11日から、2・5・7号住居跡及びそれに重複する土壙群を9月23日まで検出し、完掘する。なお列石遺構の精査追究も同時にを行う。

9月15日～9月23日

2・5・7号住居跡および重複する土壙群を9月23日まで検出し、完掘する。なお列石遺構の精査追究も同時にを行う。

9月24日～10月15日

拡張区の中央にある、2・5・7号住居跡および土壙群・列石遺構の写真撮影を9月25日から29日まで行う。9月30日から10月13日まで拡張区中央部から南側にかけ、各遺構の平面図測図作業を1～2人で行う。

#### A 地点

調査の方法は、A地点の南部にグリッド法による遺跡全体に方眼をかけ部分的調査を原則とした。グリッドの原点は、発掘区域の北側を東西に横切る公団測量杭に置いて、B地点15-23グリッドに直線上にのるようになる。グリッドの基線は、B地点と同様でX軸方向180m・Y軸方向100mを設定し、 $2 \times 2\text{ m}$ を一単位とする方眼を推定範囲の全体に掛けた。グリッドの呼称は、X軸東より1・2・3……90 Y軸で南より1・2・3……50とし、Y軸方向はN-7°-Wを測る。

A地点は、8月21日より開始し、10月15日まで調査を実施する。

8月21日～8月30日

21・22日の2日間にわたって、草刈作業を実施する。10mごとにキ字印状にグリッドを設定し、X-50・65列・Y-35・45列のグリッド粗掘り作業を行う。50-35, 65-45グリッドで1号住居跡とピット群、2号住居跡を確認する。

9月1～9月13日

さらに、西側と南東側にグリッドを設定し、遺構と遺物の検出・分布状況の作業を進め、グリッド粗掘りを行う。西側と南東側でのグリッド内で第Ⅱ層から、縄文時代中期の土器片がまとまって出土している。

9月16日～9月27日

遺構の検出の状況が不明瞭なため、51-52-34-36, 64-66-43-47グリッドの拡張粗掘り作業を進め、1・2号住居跡・1・2・3号土壇の平面プランを確認する。22日より両住居跡の精查追究作業を行ない、掘り進めて行く。25日から27日にかけて、61-65-25-35グリッドの拡張作業を行う。遺構は検出されなかったが、遺物は土器・石器とも多量に出土している。

9月29日～10月11日

1号住居跡・1号土壇・ピット群は10月3日で、土層図を取終えて完掘する。2号住居跡・2・3号土壇は10月9日で完掘を見る。10月9日～11日にかけて、両住居跡・土壇の写真撮影を行う。一部平面実測作業にかかる。

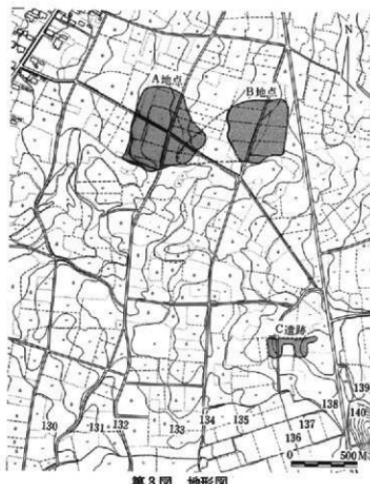
10月13日～10月15日

1・2号住居跡・1・2・3号土壇の平面測図作業を行ない。10月15日はA・B両地点とも実測作業を終了して、小林遺跡の発掘調査を終了する。

発掘調査の期間中、7月中旬から9月中旬までほとんど雨が降らず、干ばつ状態になりA地点調査の開始時には、土が乾き非常に堅くしまり、作業に大きな支障となり、A・B両

地点とも、作業能率に困難をきたした。

註 1 東根市教育委員会・小林遺跡調査団「小林遺跡-縄文前期遺跡と平安時代集落跡-」 昭和50年3月



第3図 地形図

## II 遺跡の概観

### 遺跡の立地

山形盆地の東部、奥羽山系船形山連峰および面白山連峰に源を発し西流する白水川・野川・混川は、ほぼ一つの谷より広がって扇状地を形成し、最上川に注いでいる。この三河川によって形成された合流扇状地が乱川扇状地である。本遺跡はその扇尖部標高135m付近に立地する。東に孤丘大森山（標高278m）、北に白水川、南に野川をのぞむ。

乱川扇状地の地形については、米地文夫・今野孝の研究がある。その著「乱川扇状地と周辺地域の地形」（『乱川扇状地』所収）によって本遺跡周辺の地形を述べるならば、

「乱川扇状地は、猿岳衛星線に沿って並ぶ扇状地の一つで、絶大的な規模をもつ開拓扇状地である。平均10~11km、扇鉄は小さくない。扇頂と扇端の高差は約150mに達する。扇面の大部分は洪積地で開拓地となつてゐるが、扇端の一部は依然として扇状地堆積がななわれている。地形は上位のものより順に次のように区分される。上ノ原面、太田新田面、向原面、川原子面、冲積低地面。（遺跡の立地する）向原面の性格は、山形盆地北西部の尾花沢Ⅱ面にもみられ、「若土山砂礫よりのクロボク土で、その下に新田Ⅱ層の砂疊層をもつ、上位の面を侵蝕し、数mの薄層をのせた構造を示している。」

白水川は、かつては南西に流下、「野川」と合していた。それが、太田新田面或末川堆積の進行により大森山と北東の山地を結ぶ尾根上の軟弱な河床が上がり、ついに北西側へ白水川がspill overすることによって末川堆積を主原産とする河川争奪が起り、現白水川の進歩方向に偏流したのであろう。おそらく争奪の際に当たった地点から北東方向へは急傾斜の太田新田面相当の二次的扇状地が形成されたと思われるが、現在は、その後の堆積によって出来た西面相当の急傾斜の段丘によって被覆されている」（以上抜粋要約）

となるであろう。

さて、このようにみてくれば洪積後期の尾花沢Ⅱ面に対比される向原面に遺跡が立地し、遺跡の営まれた縄文時代前期より以降は、扇状地形成はほぼ終り地形的に安定していたものといえる。しかし、遺跡に立てみるとこのようなマクロな立地論では説明し切れない点もある。上記のこととに加えて我々の地形観察の2、3をあげてみよう。

①B地点（東）よりA地点（西）へ地形が傾斜するが、B地点は周辺よりやや高くなつた微高地である。それより200m程離れたA地点は3.5m程低くなるが、やはり周辺よりやや微高地である。

② B地点の東より南、さらにA地点の南、そして西へ走る旧河道とみられる2m程低い溝地があり、①の微高地を切っている。溝地は大森山の北を流れる白水川にむかつている。

③ 遺跡周辺は粘土質の土壤によって覆われているが、②の溝地より南へいくとほとんど砂礫まじりの土壤であり、わずかにC地点（平安中期墓葬のある）周辺で①と似た微高地がある。

即ち、遺跡は砂疊層よりも粘土質壤土層のある微高地に立地しているのである。この違いは發掘してみると一層顯著に觀察できる。そこで、扇状地が形成され、向原面ができるからどのような地層堆積があつて現在に至っているかが問題となろう。これについては、以下の層序および付図を参照されたい。

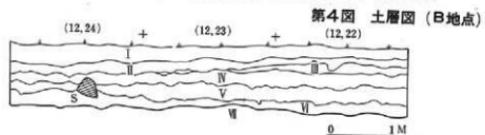
ところで遺跡周辺は、現在たばこ畑・りんご・もも等の果樹畑となつてゐる。遺跡の西隣にある小林部落の他は近接した集落はない。小林部落は、延宝年間に開かれた新田集落であり、その歴史は新しい。また周辺にある迷宮も第1回の通りである。乱川扇状地では、縄文時代の遺跡は、殆んど周囲の山麓部と扇端の平地に分布している。現在のところ扇尖部の縄文遺跡としては本遺跡のみである。

### 引用文献

山形地理学会誌 「乱川扇状地」 昭和45年

### 遺跡の層序

遺跡は、B地点東南部分の高まりを中心とする微高地である。それより四方に傾斜するが、南側一帯は旧河川によって切られている。B地点の高まりよりA地点にかけては200m程の緩斜面が続く。3.5m程の標高差である。A地点もB地点も基本的に層序は同じであるが、斜面を下るにつれて上部層の欠損という状態で觀察される。ここでは最も層序の自然なB地点の高まり（12-23・24G）の層序を基準にして説明したい（第4図）。



I層 黒土 一般に黒色を呈するが、B地点のように若干砂質をおびた腐殖質の土は黒味が強く、A地点のようにやや粘質をおびたものはやや明るい色調である。確は殆んど含まず部分的に埋没遺物が少量混じることもある。厚さ10~30cmである。

II層 黄褐色土 若干砂質をおび、やや固くしまつていて。B地点の高まり部分にしか認められない。厚さ10~20cmでC地点II層（平安時代遺物包含層）に対比される。

III層 黄褐色砂質粘土 微砂質で粘性があり、固くしまつていて。B地点の高まり部分にII層よりわずか広範囲に分布する。厚さ5~20cmである。

IV層 黒褐色土 やや砂質を帯びた、ザラザラする腐植質の土である。炭化粒子が若干混じる。A地点周縁部ではみられない。厚さ5~35cmでレンズ状堆積である。

V層 黄褐色砂質粘土 微砂質で非常に固くしまっている。A地点中央部では比較的厚く堆積している。厚さ10~40cm。

VI層 暗褐色土 微砂質でやや粘性をもち固くしまっている。炭化粒子を含む、また赤色粒子を微量に含む。A地点周縁部では堆積が厚く、中央部では薄い。B地点で

は全体的にレンズ状の堆積を示す。縄文時代遺物包含層である。厚さ5~45cm

VII層 黒褐色土 微砂質で非常に堅緻である。白色微粒子を含む。厚さ5~15cm

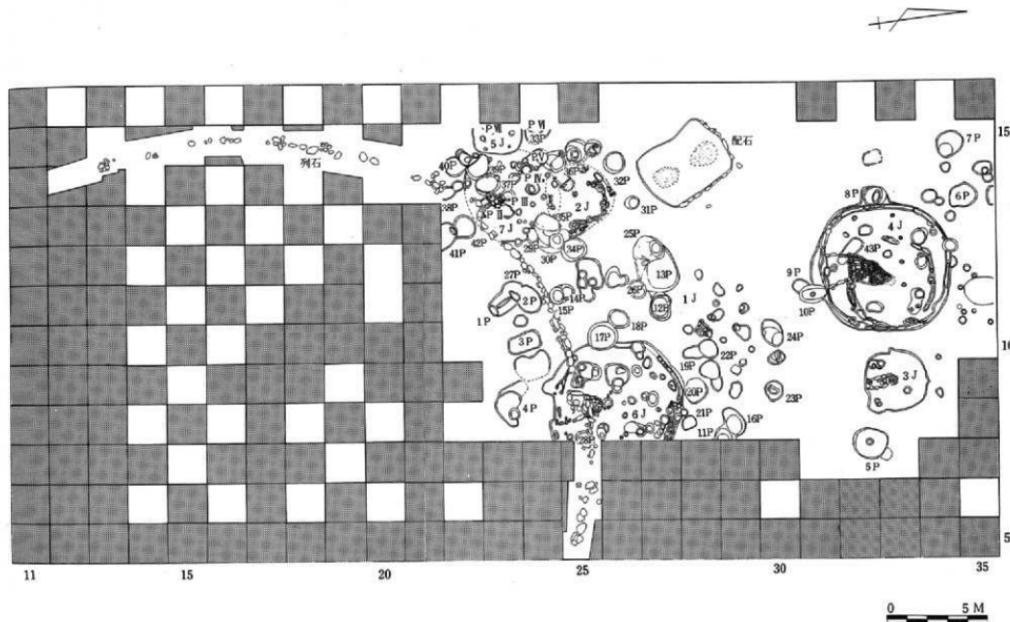
VIII層 黄褐色粘土 ローム質の粘土で、若干砂質を有する。非常に堅緻な層で、厚さは相当厚いものとみられる。

以上の8層のうち文化層は二枚あり、II層（平安時代）とVI層（縄文時代）である。II層はB地点の高まりで少範囲にみとめられ、遺物は包含していないが、C地点II層に対比される。縄文時代の遺構はVI層の下部からV層・VII層の上部を切ってつくられている。A地点ではII・III層およびIV層の一部が欠損しており、IV層およびV層が耕作されてB地点とはやや異なる粘土質の耕土ができたものと解釈される。V層とVI層は、A地点で面白い関係を有する。VI層の堆積が厚いA地点周縁部分ではV層が薄く、VI層の堆積が薄く中央部分ではV層が厚い。その原因は今のところ不明である。なお、これらの地層の地質分析を行った結果を付篇に述べるので参照されたい。

た、ザラザラする腐植質の土である。炭化粒子が若くられない。厚さ5~35cmでレンズ状堆積である。非常に固くしまっている。A地点中央部では比較的40cm。

性をもたらすものとしている。炭化粒子を含む、また高錳酸鉄では堆積が厚く、中央部では薄い。B地点で示す。縄文時代遺物包含層である。厚さ5~45cm堅緻である。白色微粒子を含む。厚さ5~15cm土で、若干砂質を有する。非常に堅緻な層で、厚さ

II層(平安時代)とVI層(繩文時代)である。II層は、遺物は包含していないが、C地点II層に對比する層で、VI層の上部を切つてくらべている。A点を欠いており、VI層およびV層が耕作されてB地点のものと解釈される。V層とVI層は、A地点で面白い互層関係ではVI層が薄く、VI層の堆積が薄く中央ところ不明である。なお、これらの地層の地質分析されたい。



### 第5回 遺構配置図 (B 地点)

## 遺構の分布

A 地点 今回の調査で検出された遺構は、住居跡2・土壤3である。

遺構はA地点の南側の地区で、ほぼ中央部に1号住居跡・1号土壤が接して在り、第Ⅵ層黄褐色粘土が落ち込み、緩傾斜している。2号住居跡・2・3号土壤は1号住居跡北西約30mの地点に在る。の附近は34~36-50・51グリッドに比べると第Ⅶ層が25~35cm高く、やや平担部に位置し、2号住居跡と2号土壤が重複し、3号土壤は住居跡に接している。なお、現標高132~133mを測り位置している。

## B 地点（第5図）

今回の調査で検出された遺構は、住居跡8・土壤43・配石遺構1・列石遺構1である。

遺構は遺跡の東部やや微高地となる。標高156.5mを測る地点に位置し、13~35-5~15グリッドの拡張区に検出された。第VI・VII層にかけて確認され、ほとんどの遺構は第Ⅶ層黄褐色粘土を掘り込んで作られている。

分布の状態は、1号住居跡は拡張区の中央北寄りにあり、19・20・22・23・24号土壤と重複関係あるいは偏在するように在る。1号住居跡の詳細が不明なため、これら土壤との新旧は不明確である。2号住居跡は、7号住居跡の北側に位置し重複関係に在り、西側に29・30・34・35号土壤と、西側で36号土壤と重複関係にあり、北側で31・32号土壤と接している。3号住居跡は拡張区の北側に在り、東側で5号土壤と西側で4号住居跡と隣接している。4号住居跡は拡張区北側の中央部に置し、2時期に亘って存在し、西側で8号土壤と南側で9・10号土壤と重複関係にある。5号住居跡は東側で7号住居跡と重複関係にあり、33・39・40号土壤と接して存在している。なお西側半分は未調査である。6号住居跡は拡張区の中央東側寄りにあり、西側で17・18号土壤と重複関係にあり、20・21号土壤と接して在り、東側は未調査である。7号住居跡は2・5号住居跡および37・39・40号土壤さらにP I~P VII不明ピットとそれぞれ重複している。各住居跡間の距離は、3・4号住居跡と2・5・7号住居跡では約10mで、3・4号住居跡と6号住居跡で約8m、6号住居跡と2・5・7号住居跡で約6mとなり、住居跡間でみるとかなり散在している。

土壤群は、拡張区の中央部から南側にかけて遍在し、集中している。列石遺構の北と南側に沿うように、北東から南西にかけてやや直線的に連っている。それぞれの土壤は住居跡と重複関係にあるものに限ると、大部分が新しくなる。5号土壤は、拡張区の北側東寄りに位置し、6・7号土壤は北西側寄りに在る。

配石遺構は、拡張区の中央部西寄りに位置し、長軸方向が列石遺構に対して直交するよう向きが定っている。4号住居跡との距離は約6.5mで、その間には遺構が検出されなか

った。

列石遺構は、拡張区の南側に在り、東側から南側にかけて半弧を描くように連って位置している。6・7号住居跡の上部にあり、新旧関係は住居跡より新しい。なお土壇との新旧関係は不明確である。

#### 遺物の分布

本遺跡からの出土遺物は、整理箱に約110箱を数えた。それらは縄文式土器、石器、自然遺物（トチ・クルミの炭化したもの）、骨片などに分けられる。縄文式土器、石器のほとんどは第VI層遺物包含層および住居跡内より出土したもので、第V層下部と土壇内よりわずか出土している。

土器：縄文時代前期 大木2・3 整理箱35個

中期 大木10 40個

石器：石錐・錐・石匙・石範状石器・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・凹石・砥石・石棒・石製垂飾品 整理箱35個

**A 地点** 遺物の出土状況は、第V層下部から第IV層にかけて多く出土し、遺物総数の9割りを示し、残りは調査地区的北西部から南部の第I層と第III層から出土したものである。土器の分布状況は、縄文時代前期土器片が調査区の西側から中央東寄りに最も多く出土し、東側では若干の希薄状態となる。縄文時代中期は少量ではあるが、東側よりの北東から南北にかけて出土し、西南側の微高地形となる部分で、ある程度のまとまりのある出土状況を示している。石器の分布状況も土器と同様であるが、調査地区中央北側寄りに若干の希薄状態になる。

住居跡内の出土状況は、1号住居跡では遺物の量は少なく、整理箱約半分であり、50・51・34～36グリッド内全体として少ない。2号住居跡内では、覆土の上・中層から多く検出し、下層・床面直上では若干少くなる。土壇内出土遺物は、各土壇あわせて整理箱にして1箱である。

このようにA地点での、遺物の出土状況・分布は、調査地区西側から東側にかけて縄文時代前期が一様に分布していると推定され、東側の北東から南北にかけて、B地点から統くと考えられる。縄文時代中期の遺物が散在している。

**B 地点** 遺物の出土状況は、第VI層中に最も多く出土し、遺物総数の6割を示し、次いで遺構内から出土したものが3割で、残りは第V層下部で2割、第I層からII層にかけては

若干出土している程度である。土器の分布状況は、調査地区的拡張区で、最も多く出土して、西側と北側で希薄になるが、16・40・45・50グリッドである程度のまとまりを示している。なお北側の11・50・20・50グリッドで、縄文時代前期の土器片が合せて12～15片出土している。石器の分布状況は、包含層より出土したもののが少なく、住居跡・土壇内および周辺地区的グリッドで出土したものが、大部分をしめている。石器の量は、A地点に比較すると整理箱にして約15箱で、その大半が磨石・凹石・砥石等である。自然遺物のトチ・クルミの炭化したものは、いずれも土壇内の覆土上部で、5・6・9・12・13号土壇である。

遺構内の出土状況は、とくに各住居跡内とともに、覆土上層から中層にかけて最も多く出土し、ある一定方向から流れ込んでいる状態で出土し、土器は一括・完形土器がやや多く出土し、総数約35個体出土している。土壇は、覆土中では各土壇ともボリ袋1～2袋程度である。なお壇底から一括・完形土器が出土しているものは、2・6・7・22・24号土壇で、覆土中から壇底にかけて出土し、河原石・緑泥変岩の風化したものが密集して検出されたものが、8・34・37号土壇である。配石遺構は、覆土・床面直上のものを合せて整理箱 $\frac{1}{3}$ 個で、遺物の出土状況は土器片のみで、散在している。

### III 遺構と遺物

#### (1) 遺構

##### A地点

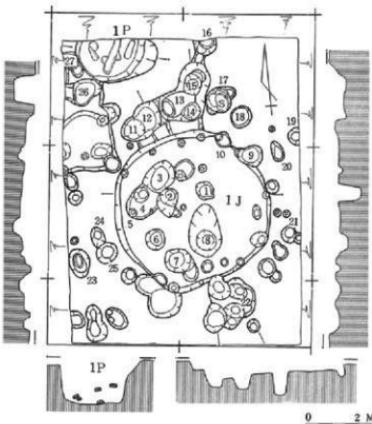
###### 1号住居跡(第6図、図版7)

発掘調査区の中央部

平坦面、50・51・34～36グリッドに位置し、確認面は第VI層上面で第V層を掘り込んでつくられている。1号土壙と不明のピット群に接して在る。遺存状態はほぼ良好である。

平面形は、南側で直線的になる不整の円形を呈し、径約2.3m深さ12cmを測る。壁は東側でほぼ垂直に10cmを掘り込み、北側から西側で比較的緩やかに傾斜している。床面は、中央部でやや落ち込んで、壁際から傾斜して、起伏に富んでいる。柱穴は、8本検出されP 1～7は、径15～50cm、深さ20～50cmの不整形を示し、覆土は黒褐色土に炭化粒子を含む軟らかい土質である。壁柱穴は12本認められ、径12～30cm、深さ20～40cmを測り、P 9・10は深く70cmである。壁溝は検出されず。

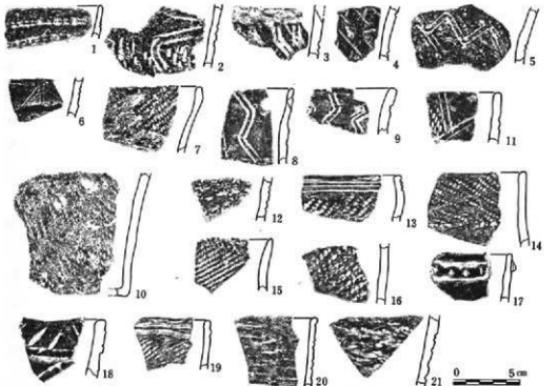
炉跡はP 8と考えられ、長径80cm、短径50cm、深さ15cmで長軸方向が真北と一致する。覆土上部で若干の焼土・炭化粒子を含んでいる。覆土は2層に区分され、暗褐色・黒褐色土でいずれも、炭化・黒褐色土粒子を含んでいる。出土遺物は、土器片52片、磨石3・石匙4・貝殻フレイク10点、石製垂飾品1点が出土している。



第6図 A地点1号住居跡、1号土壙

本住居跡に接して、周辺に58本のピットが検出し、住居跡北側から東側にかけ、やや方形を示すようになり、覆土は住居跡のものと相違し、褐色土に黄褐色粘土粒子を多く含む堅い土質である。P11～27は、径35～60cm・深さ25～70cmの不整円形を呈し、ほとんどがほぼ垂直に掘り込んでいる。ピット群の性格は、北側と西側をグリッド拡張していないため、詳細は不明確である。

1号住居の時期は、縄文時代前期大木3式期の所産と推定され、不明のピット群と住居跡の関連性は不明である。



第7図 A地点1号住居跡、1～3号土壙出土土器

1号住居跡 1～10 1号土壙 11・12

2号土壙 13～15 3号土壙 16～21

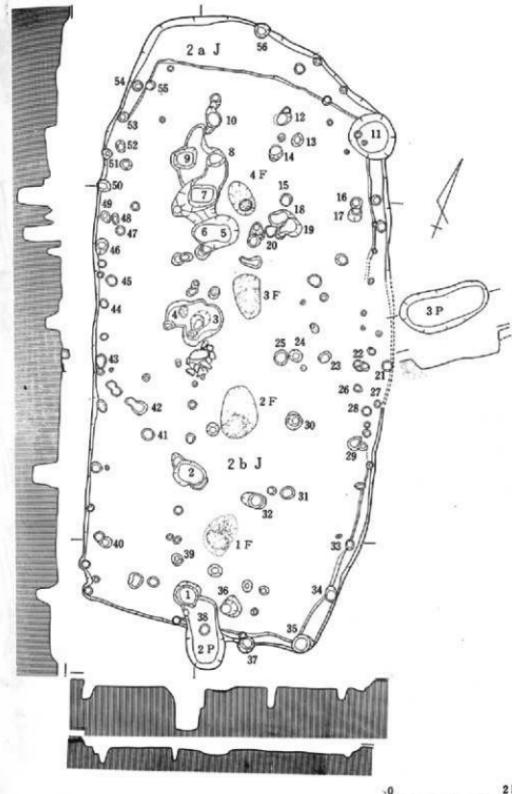
## 2号住居跡(第8図、図版8・9)

発掘調査区の中央部北西寄りの平担面、64~67-43~47グリッドに位置し、確認面は第Ⅶ層上面で、第Ⅷ層黄褐色粘土を掘り込んでつくられている。遺存状態は良好である。南側で3号土壤によって切られ、東側では3号土壤と接している。

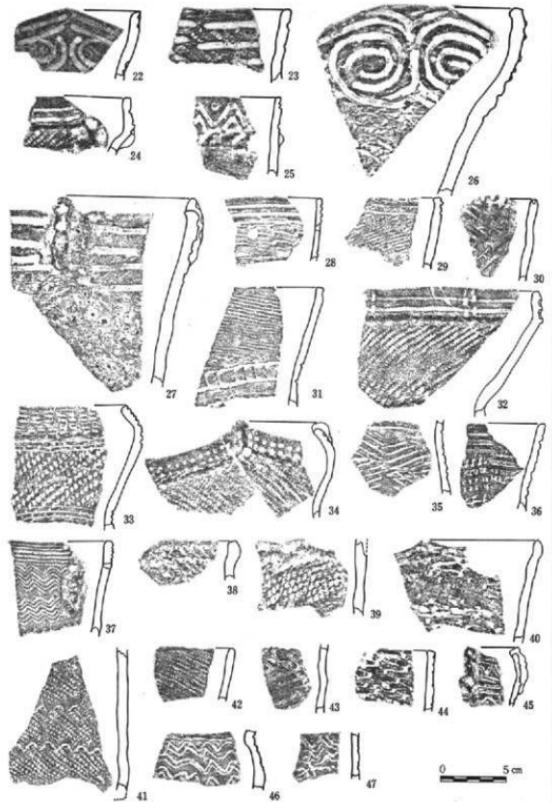
本住居跡は、覆土の状態・柱穴・貼り床の存在から拡張の住居跡と推定され、少なくとも2回以上と考えられ、2a・b住居跡である。

**2a号住居跡** 平面形は、北側隅でやや半円形になり、東・西側の中央でやや張り、西北・南東隅でやや角張っている。不整の長方形を呈し、長軸9.90m・短軸4.70m・深さ15~20cmを測り、長軸方向はN-12°~Wを示す。壁は東・北・西壁で比較的緩やかに傾斜し、南壁ではほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は15~25cmである。壁面は凹凸がなく平らである。壁溝は検出されない。床面は第Ⅷ層上部を底面として、中央部から南側にかけて起伏があり、黄褐色土と黒褐色土が混り堅く踏みしめている。北側ではみられず、概して全体に平担である。また東壁南側寄りでは非常に凹凸に富むが平担で、北壁付近では中央部に向けて傾斜している。柱穴は本柱跡に伴うものとして、P1~3・5・7・10で径30~50cm・深さ40~63cmの不整の円形になり主柱穴である。覆土は、黒褐色土に炭化・黄褐色粘土粒子を多く含み軟らかく、上部で柱の周りを黄褐色粘土で踏み固め、ほぼ垂直に掘り込んでいる。支柱穴はP12・13・15・22・23・25・30~32・36・40~42で、径25~35cm・深さ38~57cmで、覆土は黒褐色土に炭化粒子を多く含み、ほぼ垂直に掘り込んでいる。壁柱穴は33本検出され、P21・33~38・44・46・47・50~54・56・57で、径26~40cm・深さ28~52cmで斜めに掘り込んでいる。

覆土は3層に区分され、1層暗褐色土・2層黒褐色土・3層黒褐色土に大別され、2層は炭化・焼土粒子を多量に含むやや堅い土質で、3層は炭化・黄褐色粘土粒子を多量に含むやや軟らかい土質である。堆積の状態は、1・2層が住居跡北西側に向けて、南東側より流れ込むようにレンズ状に堆積し、3層は若干の凹凸があるがほぼ水平になっている。なお、焼土が1層と2層の間に20~35cmの厚さで、南東側よりレンズ状に堆積し、中央部北側寄りで3層中までたっている。出土遺物は、覆土1・2層に集中して偏在して出土し整理箱にして約4.5箱で、土器片240片、石器35・石器26・磨石・凹石・砾石が46点である。床面直上では住居跡中央部に偏在して出土し、石器12・石器3・石器7・磨石・凹石が10点である。なお、P3南側で、磨石・凹石および河原石を9点利用し、床面に接するように平らになって、やや半円を描く状態で石を配列している。なお2層中より骨片・骨粉が多量に出土している。

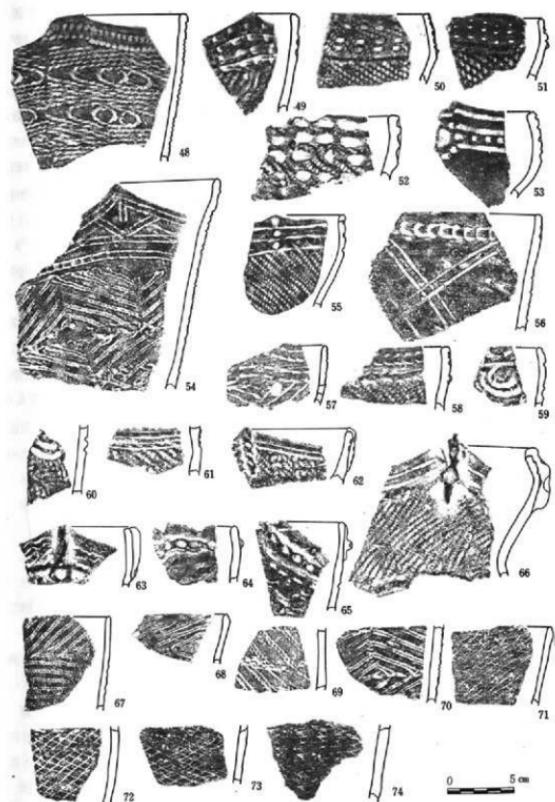


第8図 A地点 2号住居跡・2~3土壤



第9図 2・2b号住居跡出土土器  
2号住居跡22~41 2b号住居跡覆土 42~47

-20-



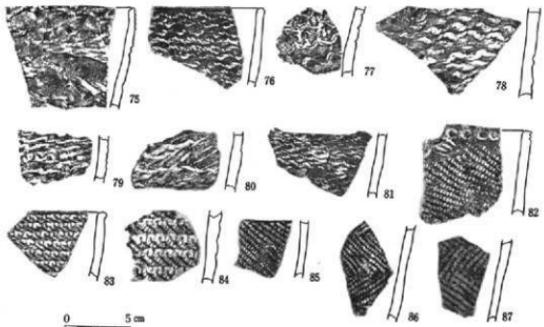
第10図 A地点 2a号住居跡出土土器  
2a号住居跡底面 48~74

-21-

**2b 号住居跡** 平面形は北壁辺が真北と直交するような、不整の長方形を呈する。2a住居跡床面を精査している際に検出した。長軸8.92m・短軸4.50m・深さ35cmで、長軸方向がN-10°-Wを測る。壁は北から東・南壁にかけ、高さ10~15cmで階段状になって認められ、傾斜がある状態で掘り込まれている。床面は、壁際でやや軟弱であり、中央部で凹凸がみられるが、おおむね平担である。壁溝は検出されない。柱穴は、主柱穴がP2・4・6・9で、径40~58cm・深さ35~58cmで不整の円形を呈し、覆土は褐色土で黄褐色粘土ブロック粒子、炭化粒子を含む堅い土質である。支柱穴は不明瞭で確認できなかった。壁柱穴は25本検出され、P16・17・28・45・49・53で径26~32cm・深さ18~32cmである。出土遺物は、床面直上より土器片6片が出土している。

本住居跡から検出した炉は4基で地床炉であり、平面形が不整橢円形を呈している。大きさは、1号炉跡で長径70cm・短径45cm、2号炉跡で長径85cm・短径60cm、3号炉跡で長径72cm・短径43cm、4号炉跡は長径61cm・短径38cmとなり、長軸方向はそれぞれN-2°-W、N-14°-W、N-16°-W、N-29°-Wを測る。各炉跡とも若干の比高差があるが、ほぼ同レベルである。1・3号炉跡の上面が黄褐色と黒褐色土が混る土層となり、それを若干掘り下げる検出した。時間的差は、1・3号炉跡、2・4号炉跡がそれぞれ同時期と推定され、2a号住居跡には2・4号炉跡、2b号住居跡には1・3号炉跡が伴うものと考えられる。

4号住居跡のそれぞれの時期は、縄文時代前期大木2式期の所産である。



第111図 A地点 2a号住居跡 出土土器  
2a号住居跡床面 75~78

#### 1号土壤 (第6図、図版10)

51~36グリッド内に位置している。北側半分は未調査のため不明である。平面形は推定で南側がややふくれ橢円形を呈し、長径1.25m・深さ65cmで短径は不明である。長軸方向はN-80°-Wを測る。壁は西側から南側へほぼ垂直になり、東側は上部で比較的緩らかになり、下部にかけてほぼ垂直に掘り込んでいる。底は、西壁付近でやや傾斜をもち、ほぼ平担となる。覆土は3層に区分され、暗褐色・褐色・黒褐色に分けられ、全体として炭化粒子が含まれ、褐色土中で黄褐色粘土ブロック・粒子が多く含まれる。なお洞原石の柱状形のものが、中層から底層にかけて南側より流れ込むように検出される。出土遺物は、土器片32片・磨石1・頁岩フレイク9点出土している。

縄文時代前期大木2式期の所産である。

#### 2号土壤 (第8図、図版10)

65~43グリッドに位置し、2号住居跡を切ってつくられている。確認面は第Ⅳ層上面であり、遺存状態は良好である。

平面形は、南側で丸味を持つ椭円形を呈し、長径1.2m・短径60cm・深さ14cmを測り、長軸方向はN-15°-Wを示す。壁は比較的緩やかに第Ⅳ層まで掘り込んでいる。底は若干の凹凸があるが、ほぼ平担である。覆土は2層に区分され、黒褐色・暗褐色土に分けられ、黒褐色土層は炭化粒子・焼土ブロック・粒子を多量に含みやや軟らかく、骨片・骨粉が多量に検出され、暗褐色土層でも若干の骨片・骨粉が認められた。

出土遺物は、土器片63片・石器1・凹石(底層から出土)1点が出土している。

時期は縄文時代前期大木2式期の所産である。

#### 3号土壤 (第8図、図版10)

64~46グリッドに位置し、2号住居跡東側に隣接している。第Ⅳ層上面で確認され、確認時点では多量の焼土ブロックが検出された。遺存状態はほぼ良好である。

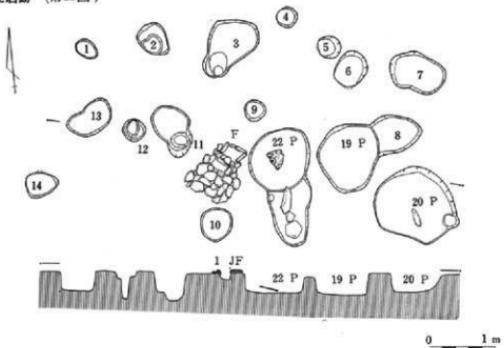
平面形は、北側で内傾し橢円形を呈する。長径1.5m・短径70m・深さ35cmを測り、長軸方向はN-53°-Eを示す。壁は比較的なだらかに第Ⅳ層まで掘り込む。壁面は凹凸になっている。底は中央部で高く、壁際に傾斜している。

覆土は3層に区分され、黒褐色・暗褐色・黒褐色土に分けられ、上層から中層にかけて炭化粒子・焼土ブロック・粒子を多く含みやや堅くしまっている。下層では炭化粒子のみ混っている。出土遺物は、土器片29片・頁岩フレイク5点出土する。

時期は縄文時代前期大木2式期の所産と考えられる。

## B地点

1号住居跡 (第12図)



第12図 B地点 1号住居跡

発掘区中央部、4号住居跡の南の平坦面、9~11~28~29グリッドに所在する。確認面はVI層下部である。石組炉の発見により追究したものの、柱穴とみられるビットを得たのみで、確認は得られなかった。

石組炉の周辺に13個のビットがめぐる。径30~40cm、深さ20~40cmの円形を基本とするものである。炉の東側は土壠によってか見つけられない。ビット覆土は、黒褐色土で、微量の炭化粒子を含み、小さな土器片や石器片が1~2片程度出土した。土器片は無文のものや摩滅した細片であり、特徴がわからない。

住居跡覆土は、黒褐色土で、若干の炭化粒子を含み、固くしまっている。覆土中の遺物は土器の細片・石器剝片が若干あるのみである。

石組炉(第12図)は、こぶし大より人頭大の細長偏平の河原石を組んだもので、三つの部分より成る。石囲部分二つと石組部分一つである。石囲部分に土器が埋設されれば、複式炉である。全体に焼けた痕跡は不明瞭である。主軸方向は、N-40°-Eで、大きさは90×70cmである。

住居跡の時期は石組炉周辺の土器からみて大木10式期に相当するとみられる。

## 2号住居跡 (第14図、図版11)

発掘区中央部南寄り、配石造構の南側、13~14~24~26グリッドに所在する。確認面はVII層上部である。土壠等の遺構によって切られ、検出できない部分もある。

不整の隅丸方形プランで、大きさは3.2×3.1mである。長軸方向はN-63°-E。壁は部分的にしか検出できなかった。比較的垂直に近い形で立ち上がる。住居跡の深さは40m前後とみられ、床面はVII層のローム質粘土を固く踏みしめ、平坦になっている。

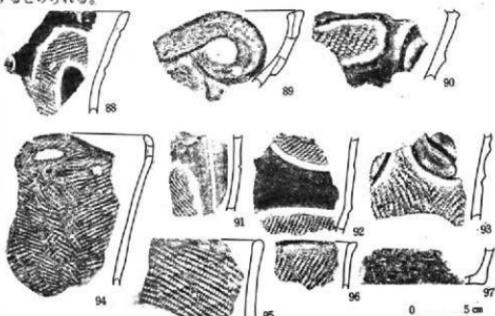
柱穴は、支柱穴4・8・12と支柱穴11個である。支柱穴は壁に寄っており、炉の側の二本が特に深い。径20~30cm、深さ35cm前後、円形である。支柱穴は、径20~30cm、深さ10~20cm、円形である。壁近くをめぐる。周溝は、壁に沿い、北辺・東辺では顯著である。15×30cm、深さ10cm程度の掘り込みの連続による。二本の方向の異なるものが走る。

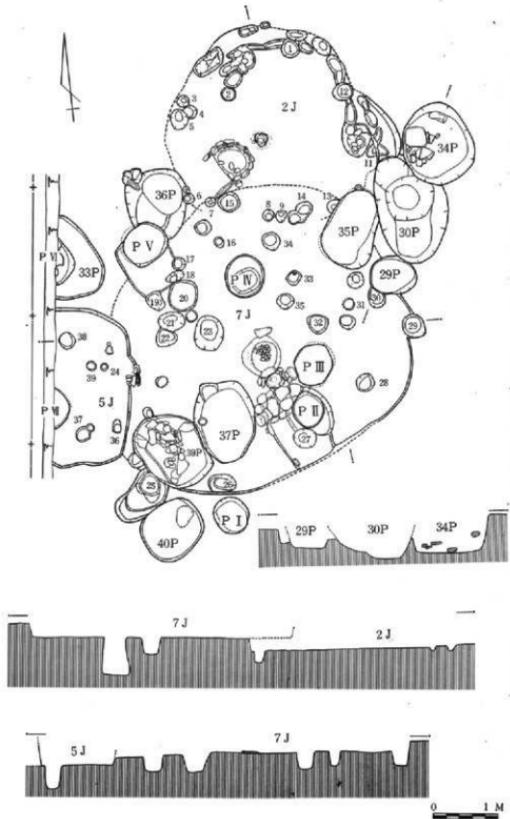
住居跡覆土は、9層に区分され、大半が黒褐色土で、炭化粒子・赤色粒子・ローム粒子を含む。壁近くでは、ローム粒子が多くなる。遺物は、土器片・石器少量である。

炉は(第22図2)、複式炉で、主軸方向N-62°-E、大きさ1.4×1.3mである。土器埋設部では石組はなく、埋設土器下半部と焼土のみである。石組部中央の石はなく、側縁の石も抜かれている。前庭部の石は抜かれて、検出されない土器埋設部・石組部ともに焼け、焼土は厚い。覆土より土器細片・凹石が出土している。

南側を東より30P・35P・7J・36Pによって切られ、この周辺で最も古い遺構である。

住居跡の時期は、埋設土器および床面の土器の時期からみて縄文時代中期大木9式期に相当するとみられる。

第13図 B地点 2号住居跡出土土器  
2号住居跡覆土 88~97



第14図 B地点 2・5・7号住居跡

3号住居跡 (第15図 図版12)

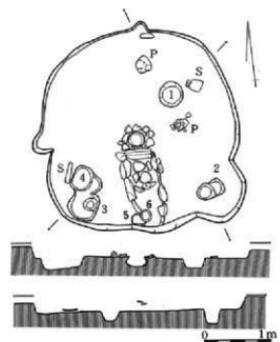
B地点の東側寄り平粗面、4号住居跡東側の31~34・8~10グリッドに位置している。第Ⅱ層中で確認され、第Ⅲ層の中位まで掘り込んで作られている。遺存状態はおおむね良好である。

平面形は、北・西側の一部および南東隅で大きく張り出す不整円形を呈し、長・短径いずれも3mを測る。確認面から深さは東側から南側壁で20~25cm、北側から西側壁にかけては15~20cmを測る。壁は第Ⅵ・Ⅶ層を掘り込み東・南側で比較的傾斜を示し、その他はほぼ垂直となっている。周溝は認められない。床面は若干の凹凸が認められ、東側から中央部にかけて傾傾斜となるが、ほぼ平坦である。中央部の炉跡付近でやや堅く踏みしめられている。柱穴は6個検出され、中央北東寄りと南側壁近くに位置している。P 1は径35cm・深さ15cm、P 2は径25cm・深さ20cm、P 3は径20cm・深さ25cm、P 4は35×30cm・深さ20cm、P 5は径15cm・深さ30cm、P 6は径20cm・深さ23cmを測る。なお主柱穴はP 1・2・4である。

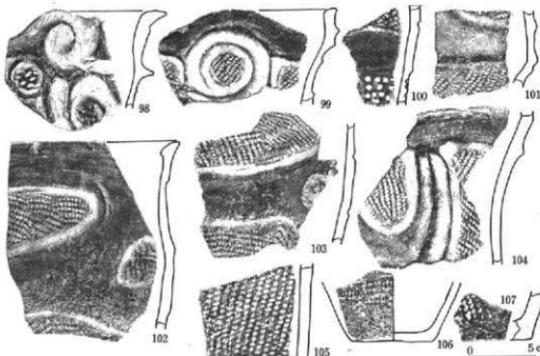
覆土は3層に大別される。1層は暗褐色土で炭化粒子を含みやや堅く、2層は黒褐色土で炭化・赤色の粒子を多く含みやや軟らかく、3層は褐色土で炭化粒子を非常に多く含み軟かい。土層の堆積状態は中央北側に流れ込むように、レンズ状に堆積している。

2 遺物は覆土1~2層にかけて出土し、住居跡南側で自然礫・河原石が中央部に流れ込むように検出された。土器片は83片で半・完形土器(深鉢形土器)3個体で、1つは炉跡の埋設土器、あるいは住居跡東側寄りに上から押しつぶされた状態で出土している。石器は、いずれも住居跡床面で、石皿2・砾石2・磨石4・石棒1・石錐1点である。

炉(第22図6)は住居跡中央部から南壁にかけてる複式炉である。全長1.5M、最大幅75cm、基軸方向N~8°~Wを測る。構造の状態は、床面を前庭部で比較的の平坦に15~20cm、さらに傾斜をもって燃焼部で10cm掘り込み、燃焼部から自然石を積み上げてつくられている。石の配列は全体として不規則で、前庭部・燃焼部では長径10~35cmの綠泥変岩(風化



第15図 B地点 3号住居跡



第16図 3号住居跡 出土土器  
覆土 98・99 床面 100～107

したもの)・砂岩などを使用し、埋設土器部で周囲に石皿片・磨石などを使用している。埋設土器は、深鉢土器で胴下半部が欠損し、西側で土圧により破損が多いが正位の状態で原形をとどめている。焼成の度合は、燃焼部の中央で若干のカーボンが付着し、両側と北側の石が良く焼けている。埋設土器部は、土器自体二次焼成を受け、上面で若干焼け、底面で少量の焼土が認められる。

住居跡の時期は、炉の埋設土器・床面から出土した土器を考慮して、縄文時代中期大木10式期の所産である。

#### 4号住居跡(第17図、図版13・14)

B地点東側寄り平坦面、31-34-10-14グリッド内に位置し、3号住居跡西側にある。確認面は第Ⅳ層中で、第Ⅴ層黄褐色粘土上部まで掘り込んでつくられ、8号土壌によって切られ、10土壙を切ってつくられる。造存状態は、住居跡中央寄りおよび東南側で一部後世による擾乱を受けているほか、良好である。

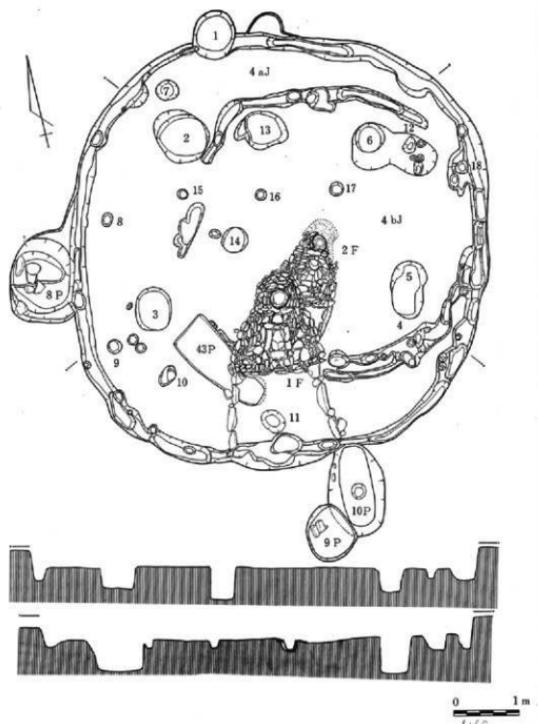
本住居跡は、壁溝・柱穴・炉跡の状態から、2軒の住居跡が認められ、4a・b号住居跡である。

4a号住居跡 平面形は、北・西・南壁がやや張り出す不整の隅丸方形を呈し、長径6.55m・短径6.34m・深さ28～35cmを測り、長軸方向N-12°Eを示す。壁は、西壁(28～30cm)に比較して、北壁から東壁にかけて高さ32～35cmとなり、西壁で第Ⅴ層上面・東壁で第Ⅳ層を10cm掘り込み、全体として垂直となる。壁面は南壁で凹凸が認められる。壁溝は、幅12～30cm・深さ15～25cmで、比較的傾斜をもって掘り込まれ、底部で若干の起伏があるがおむね平坦である。東・南側壁溝にかけては、西側壁溝に比べて深く、壁柱穴が多く認められる。東側中央部で4b号住居跡壁溝と重複している。床面は第Ⅴ層上部を底面として、東側が若干高く北西・南西にかけて緩やかな傾斜を示し、凹凸がある。東側から炉跡中央部付近まで堅く踏みしめられ、西・北側壁溝付近で軟弱となる。

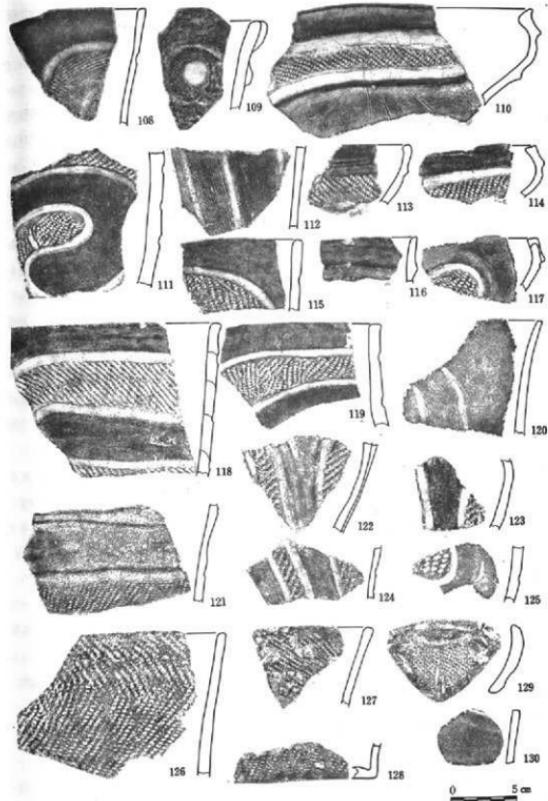
v. 柱穴は、P1～4が主柱穴でP6～11・15～18が支柱穴である。主柱穴は径45～95cm・深さ31～42cmで不整円形を示し、ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は、黒褐色土に炭化焼土・黄褐色粘土粒子が混り散らかく、柱穴上部で黄褐色粘土で踏み壓めている。支柱穴は、径10～15cm・深さ15～25cmで、柱穴内は黒褐色土に炭化粒子を含む土層が覆っている。なおP8・15～18がほぼ東西に走るのが特徴で、一様な形状を示している。壁柱穴は、壁溝に沿って巡り、径10～20cm・深さ16～22cmで、16本検出された。

住居跡覆土は、4層に区分され、1暗褐色土・2黒褐色土・3明黒褐色土・4暗黒褐色土に大別され、1層は第Ⅳ層に近似し(10～15cm)、2層は炭化粒子・焼土粒子・ブロックを多量に含みやや強く(10～25cm)で、1・2層とも住居跡中央部に認められレンズ状に堆積している。3層は壁付近で認められ、黄褐色粘土粒子が混る。4層は、覆土下層で多量に炭化粒子・ブロックを含み軟らかく(10～15cm)、ほぼ水平に堆積している。

出土遺物は、覆土2層で南東側から中央部付近に向けて流れ込むように、河原石に混つて折り重なる状態で、土器・石器・石器が多量に出土している。完形・一括土器が42個体、石皿片3・磨石四回33・砥石5・石棒1点が検出され、整理箱8個である。床面直上からは、出土遺物が少なく1号炉北側で2個体の土器が出土し、磨石3点で、土器片22片・フレイク7点である。



第17図 B地点 4号住居跡



第18図 B地点 4号住居跡出土土器  
覆土 108~112 底面 113~130

**4 b 号住居跡** 4 a住居床面精査中に検出したものである。平面形は、東・南側が若干張る隅丸方形を呈し、長径4.5m・短径4.4mを測り、長軸方向はN-13°-Eを示す。周溝は幅10~15cm・深さ12~17cmで、西側の一部で確認できず、南側で2本になり、底面はほぼ平坦である。床面は4 a J 床面を数センチ掘り下げる時点では検出し、若干の凹凸があるがほぼ平坦である。柱穴は、P 5・12・13が主柱穴で、径35~65cm、深さ36~55cmの不整円形になり、ほぼ垂直に掘り込んでいる。支柱穴は13本認められ、周溝付近を巡って、径12~20cm・深さ10~15cmである。周溝・柱穴の覆土は、明褐色土で黄褐色粘土ブロック・粒子を多量に混る堅い土質である。出土遺物は、2号炉から埋設土器2個体・柱穴から土器7片を検出している。

**1号炉**（第22図5）は、4 a住居跡の中央南寄りから南壁にかけて在り、複々式炉である。全長2.6m・最大幅1.5m・基軸方向N-12°-Wを測る。構築の状態は、前部で床面を30cm、さらに燃焼部で傾斜をもって20cm掘り込む。石の配列は全体として規則的になっており、燃焼部は底面で平面の河原石・風化礫を用い、西側に小礫や磨石を使用し下部から積み重ねている。埋設土器部では2個体の窓形深鉢形土器を埋め込み、周りに小礫を使用し配列している。最終段階で、外側になる小礫・磨石・凹石を使用し、袖石に柱状形になる河原石・風化礫を用いている。埋設土器は2個体とも、胴下半部が欠損し正位の状態になっているいざれも二次焼成を受けた度合が少なく、底面で炭化材が2~3cmの厚さに堆積している。炉全体の焼成の度合は、各部分とも明瞭に確認することはできない。

**2号炉**（第22図5）は、4 b住居跡の対角線上の南西隅に位置している複々式炉である。南西側は1号炉により破壊され、下部に存在している。全長1.2m・最大幅1mで、基軸方向はN-27°-Eを測る。構築の状態は、床面を前部で10cm、燃焼部でさらに27cm掘り下げて、1号炉と同様な構築法をとっている。なお北東側で石が抜き取られ、南西側では石が抜かれたビットが検出された。燃焼部では多量の炭化材が付着し、底面の石が焼けている。埋設土器部は、2個体の土器が埋設され、南西側では斜めに入り込み、胴下半部が欠損し、北東側では正位の状態で口縁部欠損の深鉢形土器である。北東側土器の底部に多量の焼土が検出され、二次焼成を受け、上部で石が良く焼けて、周囲に焼土が散在している。

**4号住居跡**の時期は、いざれも炉跡内埋設土器から推定し、縄文時代中期大木10式期に比定される。

#### 5号住居跡（第14図 図版16）

発掘区中央部の西南寄りの2号住居跡・7号住居跡の西、15・16・22・23グリッドに所在する。確認面はⅤ層上部である。西側半分は未掘で確認していない。

東半分で判断する限り径2.5mの隅丸方形プラン・長軸方向はN-7°-Eである。壁は、ほぼ垂直に近い立ち上がりを示し、深さは20~25cm程度である。Ⅵ層より切りこんでつくられたとみられるので、住居跡の深さは40cm前後になるものとみられる。

床面はⅣ層のローム質粘土を固くしめており、目立った凹凸はみられない。

柱穴は全体が不明であり、東半分に3個確認できた。P34・35・37で、径15~25cm、深さ15~20cmの円形のもので、主柱穴・支柱穴の区別は不明である。周溝および壁柱穴は不明である。炉も西半分にあるものとみられる。住居跡の北東寄りに理塑炉I基を検出したが、土器下半部が埋設され、周囲に焼土が薄くあった。

覆土は8層で、大半が炭化粒子・赤色粒子を含む黒褐色土である。ローム粒子も含まれ、やや柔かい。東壁近くは、ロームブロックを含んだ褐色土や炭化粒子を含む黄褐色土等が混在する。遺物は土器片が少量である。

住居跡の中央をP置が切っており、また隣の7Jの西側を本住居跡が切っていた。本住居跡は7Jより新しく、PⅦより古いくことになる。本住居跡の時期は、床面出土土器より推定して縄文時代中期大木10式期に相当するとみられる。

#### 6号住居跡（第20図 図版15）

発掘区中央部南東寄りの平坦面、列石造構の下、8~10~24~27区に所在する。確認面はⅣ層下部である。列石造構の下より検出された。東側約5分の1の部分が未掘で確認していない。

不整の隅丸方形プランを呈するとみられ、長軸方向N-23°-W、大きさは6.8×6.6mである。深さはⅣ層上面より30cmであるが、Ⅴ層下部より切りこまれていることを発掘中確認できたので、実際は50cm前後の深さとみられる。壁は、北側がやや緩やかな立ち上がりを示すのに対し、西・南側が垂直に近い立ち上がりを示す。

周溝が壁に沿ってめぐる。西側では充分検出できなかった。北~西の周溝は、壁に接して走るが、南側では壁よりやや離れる。北側で3本、南側で2本の周溝が走ることから建て替え等が考えられるが、明確でない。周溝は15×30cm程度の掘り込みの連続によるもので、深さ10cm程度である。周溝には壁柱穴が間隔をおいてめぐらしている。

柱穴は20個。P 1~5は主柱穴で、径30~50cm、深さ50cm前後である。配置は整った五本柱である。P 6・10・14はある段階での主柱穴にもみられる。径40cm、深さ30~50cm。

その他は補助的なものである。

床面は埴層のローム面まで掘り込んで固く踏みしめている。目立つ凹凸はみられない。中央より南側には複式炉がある。床面の遺物は土器・石器少量である。

住居跡覆土は12層である。大部分が黒褐色土で、灰白色粘土・ローム粒子・白色粒子・赤色粒子・炭化物粒子を多量に含む。壁近くでは、ロームブロック・ローム粒子が多くなり、北東方向より層が流れ込んだ状況がみられる。遺物は多量の土器・石器が出土した。

炉（第22図3）は埋設土器と石組を用いた複式炉で、主軸方向は磁北である。主柱穴の配置の方向と一致する。住居跡の長軸方向より28度東へふれる。おおむね馬蹄形プランで $2.3 \times 1.4m$ の大きさである。先端部は焼けた径50cm・深さ10cmのおこみである。石組部には埋設土器（径35cm）とおこみ部分（深さ30cm、焼けている）があり、開口部に径30cm程度の焼土がみられた。このような状況から二次的な使用も考えられる。

出土遺物のうち床面直上のものは少ないが、炉の先端部と南壁の突出部に一括土器を得ている。住居跡の時期は、埋設土器およびこれらの土器より推定して縄文時代中期大木9式期に相当するとみられる。

本住居跡は、18P・28Pによって切られ、28Pおよび本住居跡の上に列石造構がある。新旧関係は古い方より6J → 28P → 列石造構となる。18Pは6Jより新しい。

#### 7号住居跡（第14図 図版16）

2号住居跡の南隅り、13~15~22~24グリッドに所在する。確認面はM層下部。他の造構によって切られたため確認できない部分も多い。

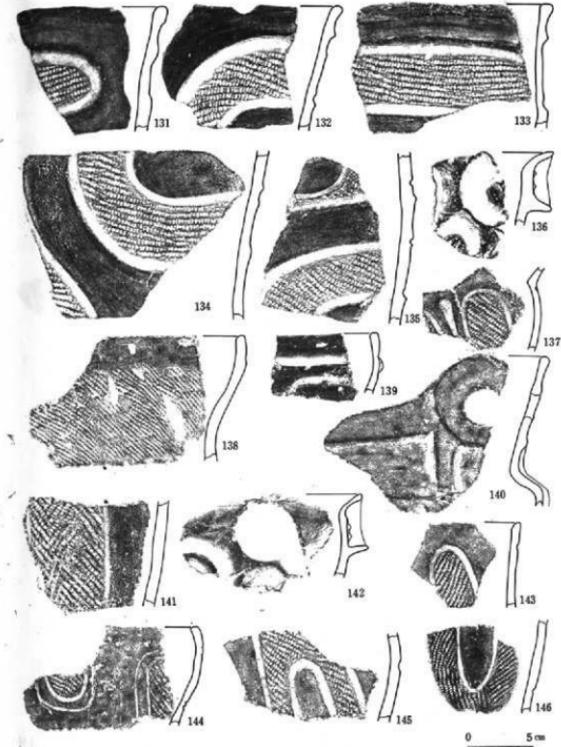
隅丸方形プランで、大きさ $4.1 \times 5.0m$ である。長軸方向は炉と直交するN-67°-E。壁は南側のみ確認した。垂直に近い形で立ち上がる。確認壁高15cm。実際は40cm位予想される。床面はM層面を固くしめているがやや軟弱。目立つ凹凸はみられない。周溝はない。

柱穴は、主柱穴P19-32-34-36、支柱穴6個、壁柱穴15個である。主柱穴は、中央に寄り、径30cm、深さ30cm前後である。支柱穴・壁柱穴は、径20~50cm・深さ20cm前後である。

住居跡覆土7層の大半は、黒褐色土で、若干の炭化粒子・赤色粒子・ローム粒子を含み、微砂質で固い。西南方向より覆土が流れ込んでいる。遺物は全般に少ない。

炉（第22図3）は複式炉である。主軸方向はN-23°-Wを測る。先端は焼土の落ち込みで、小さな河原石を敷いてある。石組の石は相当抜けている。先端部と埋設土器部は焼け方が顕著である。

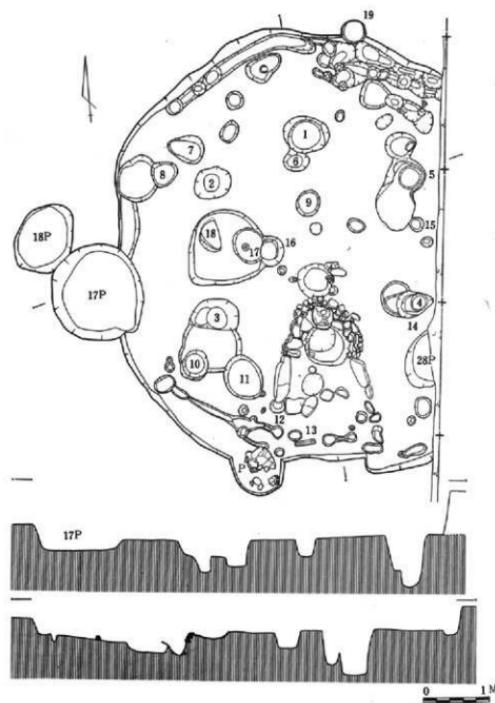
列石造構の下にあり、29P・35P・37P・39P・PⅡ～PV・5Jによって切られている。北側



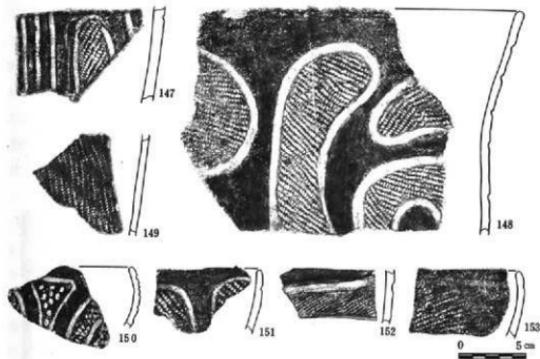
第19図 B地点 5・6号住居跡出土土器  
5号住居跡 覆土 131~135  
6号住居跡 覆土 136~143 床面 144~146

は2Jを切っている(古) 2J → 7J → 5J (新) 各土壤となるとみられる。

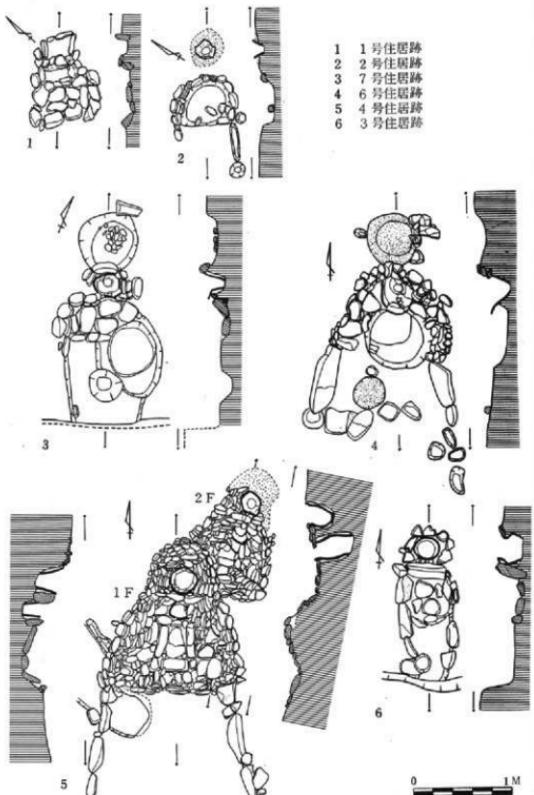
時期は埋設土器・床面直上の土器より推定して縄文時代中期大木9式期に相当するとみ



第20図 B地点 6号住居跡



第21図 B地点 6・7号住居跡出土土器  
6号住居跡 床面 147~149  
7号住居跡 床面 150~153



第222図 B地点 各住居跡 複式戸

土 壤 (第23・24図、図版18~21)

土壤は発掘区の中央部に集中偏在し位置する。第VI層中および第V層上面で確認され、第V層黄褐色粘土を掘り込んで作られている。平面形は基本的に円形、楕円形、長方形のおおむね3種類に分けられる。とくに今回の調査で、2つの覆土の違いが明らかになったことである。①黒褐色・褐色土中に炭化粒子および焼土のブロック・粒子を多く含むもの、②黒褐色・褐色土中に黄褐色粘土粒子・ブロックを含むものである。今回の報告では、平面形および覆土の違いによる、代表的な形態を説明するものである。

1号土壙 23・24-11グリッドに位置し、確認面は第VI層中である。平面形は不整の方形を呈し、長1.7m・短径1.0m・深さ40cmを測る。長軸方向はN-33°-Wを示す。壁は上部から垂直に掘り込まれ、下部で緩くなるやかになる。壙底は起伏があり壁で比較的傾斜し、中央部に長径90cm・幅20cm・深さ15cmの溝と北・南壁に接して、前者は60×30cm・深さ15cm、後者は65×35cm・深さ25cmのピットがある。覆土は3層に区分され、黒褐色・褐色・暗褐色土に大別され、褐色土中には、黄褐色粘土ブロック・粒子を多量に含み軟らかい。出土遺物は土器片のみで26片である。2・27号土壙を切って構築している。

2号土壙 平面形は楕円形を呈し、長径約1.4m・短径1.15m・深さ33cmを測る。長軸方向はN-52°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、南壁に顯著である。壙底は中央でやや低いが、ほぼ平担である。覆土は3層に区分され、いずれも黒褐色で、下部にいくに従って炭化・焼土の粒子が多く、土質は上部で堅く下部で軟らかい。出土遺物は、北壁寄り壙底に接して、2個体の半完土器(深鉢形)が出土した。出土の状態は、土器胴下半部を伏せたような状態で、それに別個体が覆いかぶせたような状態で、土圧により南側へ押し潰されている。

3号土壙 23・24-10グリッドに位置し、確認面は第VI層中である。平面形は長方形を呈し、長径1.15M・短径90cm・深さ45cmを測り、長軸方向はN-13°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれるが、北壁で比較的傾斜をもつ。壙底は北から南側にかけて緩傾斜で、ほぼ平担である。覆土は1号土壙と同様な堆積を示し、黒褐色・褐色・暗褐色土に大別される黄褐色土は黄褐色粘土ブロックを多量に含み、15~20cmの厚さで水平に堆積している。

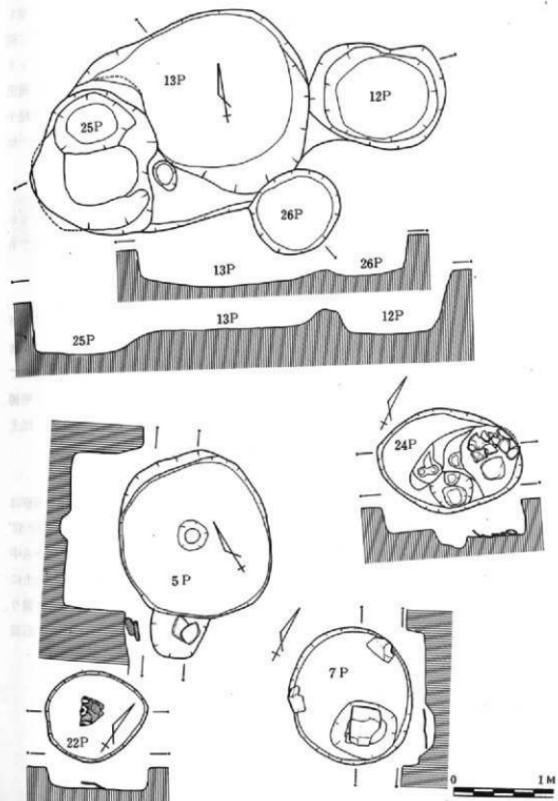
**5号土壙** 32・33-7・8グリッドに位置し、第Ⅷ層上面で確認された。平面形は不整円形を呈し、径1.2m・深さ70cmを測る。壁は南壁で上部が緩傾斜で掘り込まれるが、その他はほぼ垂直になっている。壇底はほぼ平坦で、中央に円形の径30cm・深さ12cmのピットがある。覆土は4層に区分され、①黒褐色土・②褐色土・③黄褐色・④黒褐色に大別され、②層で炭化焼土粒子を多量に含み、トナ・クルミの炭化したものが検出され、③層は炭化粒子・黄褐色粘土ブロックを多く含み軟らかく、北側から流れ込むようにレンズ状に堆積している。出土物は①-③層のみで、土器片61片・磨石1・四石2点が出土地している。

**7号土壙** 34・35-14・15グリッドに位置し、第Ⅷ層上面で確認された。平面形は円形を呈し、径90cm・深さ20cmを測る。壁は、比較的直立に掘り込まれる。壇底は平坦で、径60×55cm・深さ15cmのピットが認められる。覆土は2層に分けられ、いずれも黒褐色土である。上層で炭化・焼土粒子を含み軟らかい。出土物は、北・西壁に接し落込ような状態で出土し、ピット上面に水平に在る。いずれも一個体で深鉢形土器の胴下半部が欠損している。覆土中より土器片12片・真岩フレイク3点が出土地している。

**12号土壙** 26・27-10-12グリッドに位置し、確認面は第Ⅷ層中である。平面形は不整の円形を呈し、長径1.35M・短径1.1M・深さ43cmを測る。壁は上部から比較的ゆるやかに掘り込まれている。壇底は若干の起伏があり、中央に向て傾斜している。覆土は5層に区分され、褐色土・黒褐色土の順となり、上層では炭化粒子が含まれ、下層にいくに従って炭化・焼土粒子を多く含み、中層で焼土ブロックと黄褐色粘土ブロックが多量に混り合って、レンズ状に堆積している。出土物は、中層黒褐色土にクルミの炭化物を検出し、土器片52片・四石1・磨石2・真岩フレイク21点が出土地している。13号土壙を切ってつくられている。

13・25・26号壙は12号土壙と同様の形態を示し、新旧関係は、(新)12号土壙→13号土壙→25号土壙(旧)で、13号土壙と26号土壙の関係は、26号土壙が新しい。

**22号土壙** 28-10グリッドに位置し、第Ⅸ層上面で確認した。平面形は東壁で直線的な不整円形を呈し、径90cm・深さ24cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壇底は中央部で凹凸があり、壁際で平坦となる。覆土は2層に分けられ、褐色・黒褐色土で全体に炭化・焼土粒子を含みやや硬い。出土物は、壇底中部の床面に接して、胴上半・底部欠損の一括土器が出土地している。覆土中から土器片11片のみ出土する。



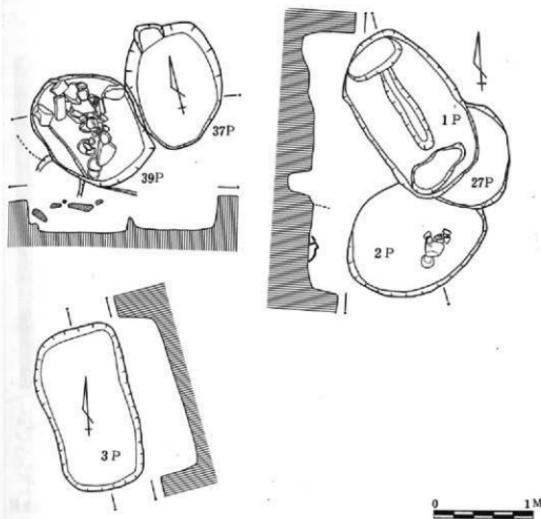
第23図 B地点 5・7・12・13・22・24-26号土壙

**24号土壙** 30-10グリッドに位置する。確認面は第Ⅴ層中である。平面形は楕円形を呈し、長径1.5m・短径1m・深さ35cmを測り、長軸方向はN-65°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、東壁の一部が袋状となる。壙底は西側で平坦であるが、中央部で不整のピットがあり、東側でさらに15cm掘り込まれ平坦となる。覆土は3層に区分され、褐色・黒褐色・暗褐色土に大別され、上・中層で炭化・焼土粒子が多く認められ、若干の黄褐色粘土粒子も含まれる。出土遺物は、東側で壙底に接して、押しつぶされた状態で口縁部欠損の一括土器が出土し、さらに風化礫・凹石・磨石が複数個の状態で検出された。

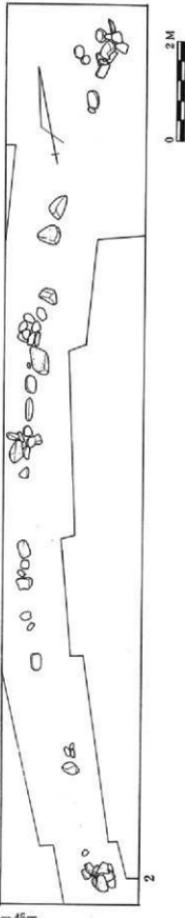
**27号土壙** 1号土壙精査中に確認されたものである。2号土壙を切ってつくられているが、平面形はほぼ楕円形となるが、詳細は不明である。形態的に1号土壙と類似するものである。

**37号土壙** 23-14グリッドに位置し、7号住居跡・39号土壙を切ってつくられている。平面形は、東・西側がやや張る楕円形を呈し、長径1.2m・短径95cm・深さ35cmを測る。長軸方向はN-3°-Eを示す。壁は南壁で垂直になり、他は比較的傾斜をもって掘り込まれている。壙底は若干の起伏があるが、ほぼ平坦である。覆土は3層に区分され、褐色・明褐色・暗褐色土に大別され、明褐色土は黄褐色粘土ブロック・粒子が含まれ軟らかい。出土遺物は、土器片46片・頁岩フレイク片10点が出土している。

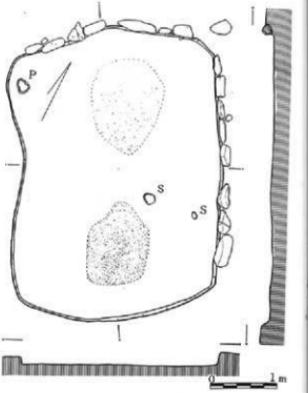
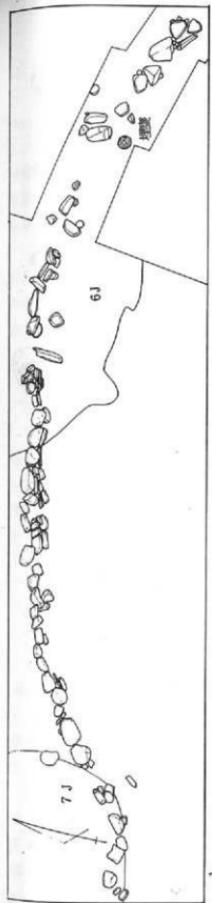
**39号土壙** 23-24-14グリッドに位置し、7号住居跡を切ってつくられている。平面形は南壁で方形になる楕円形を呈し、長径1.3m・短径1m・深さ37cmを測り、長軸方向N-42°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれる。壙底は西壁際で階段状になり、北・南壁から中央部にかけてやや傾斜となっている。覆土は3層に区分され、黒褐色・褐色・暗褐色土に大別され、全体として炭化粒子を多く含み、上・中層で焼土粒子・ブロックが少量に混り、河原石・風化礫が重なり合い、北側の石が焼けている。出土遺物は、土器片が71片・石皿片1・磨石4・凹石1・砥石2点が出土している。



第24図 B地点 1~3・27・37・39号土壙



-45-



第25図 B 地点 配石遺構

### 配石遺構 (第25図 図版17)

2号住居跡の北側は、26-29-14-16グリッドに位置する。第VI層中位で石組列を北西側と南西側で検出した。なお南側では若干の傾斜面のため、第VII層上面で確認した。

平面形は南側で内側に入り込む不整形を呈し、長径4.4m・短径3.0mで、確認面からの深さは北から東側で16cm、南から西側で10cmを測る。壁は第VI・VIIを東側で比較的傾斜をもって掘り込み、その他のほぼ垂直である。底面は第VIIを面とし、若干の凹凸は認められるが、ほぼ平坦である。溝・柱穴などの付属施設は認められない。焼土が北・南側の2ヶ所で比較的広範囲に検出され、北側は1.4×1.1M、南側で1.2×0.9Mを測り、底面が6~10cmの厚さに焼けている。とくに南側は密で鮮明に焼けている。

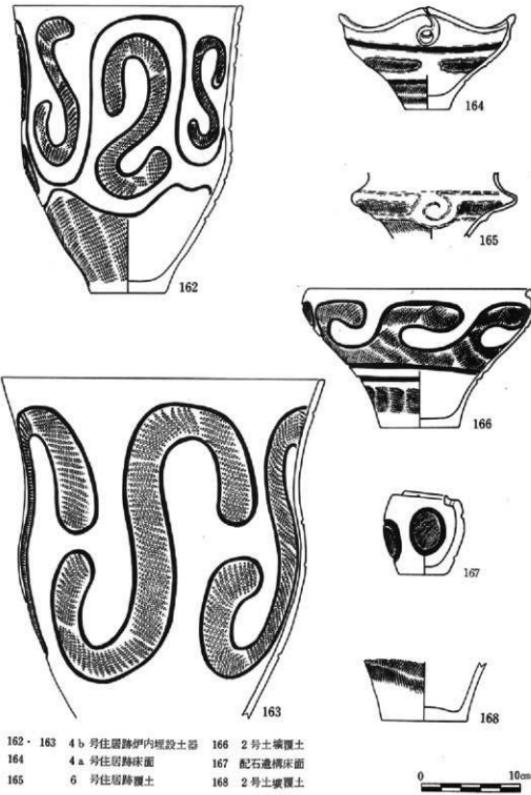
配石の状態は、遺構の北辺と東辺のみに検出され、長径30~60cmの自然礫・河原石を利用し、壁の上部を若干掘り込んで、やや規則的に配列している。北辺中央に石棒を利用したものもある。

覆土は2層に区分され、上層は暗褐色土で、下層は黒褐色土で炭化・焼土粒子を含み、中央北・南側寄りで顯著に認められる。土質は軟らかく、水平に堆積している。遺物は土器片25片のみである。底面西側隅で倒立した土器底部の中から、正位の状態で小形完形土器(第28図167)が出土している。時期は縄文時代大木10式期の所産である。

### 列石遺構 (第27図 図版21-22)

B地点の東部寄り南端の平担面から緩傾斜面に位置し、東側から南側にかけ弧状をなすように連なる。第V層中で確認され、第VI層上面までたっしている。6・7号住居跡付近では一部、第VII層を掘り込んでいるものもある。

全長は径45Mの1/3の弧状となり、径30~60cmの長形・円形を示す河原石を使用し、材質



162・163 4 b 4号住居跡伊内埋設土器  
164 4 a 4号住居跡床面  
165 6 6号住居跡覆土  
166 2 号土壙覆土  
167 配石造構床面  
168 2号土壙覆土

第28図 B地点 各遺構出土土器

は、綠泥変化の風化したもの、安山岩・砂岩などである。

(第27図1)は22~25-5~13グリッド内に位置し、6・7号住居跡の覆土上面にある。石の配列は東・西側で不規則である、6・7号住居跡にかけては比較的に規則性を示し、とくに6号住居付近では、1.5~2.5mの間隔で縦平礎と方形状礎を組み合せ、方形礎を縦位にし縦平礎を横位の状態にし、規則正しく配列している。25-6グリッドで、深形土器(高さ45cm)の埋設土器を正位の状態で検出する。掘り方などは不明であるが、覆土は黒褐色土で黄褐色粘土ブロックを多く含む。

(第27図2)は14・15・13~21グリッド内に位置し、38号土壙上面にある。(第27図1)に比べて、不規則的な配列も間隔の幅があり、ブロック状になり簡単に放置されている状態である。列石造構の下部から、付属施設や土壙等は検出されなかった。時期は列石間から出土する土器片を考慮して、縄文時代中期大木10式期以降の所産と推定される。

## (2) 遺物

本遺跡から出土した遺物は、整理箱にしてA地点で土器約30箱・石器約25箱出土し、B地点は土器約25箱・石器10箱である。遺物の説明は、A・B両地点とも、遺構内から出土した遺物を中心に取り扱う。土器については、第1群土器を縄文時代前期(A地点)、第2群土器を縄文時代中期(B地点住居跡内)とし、さらに類別に分類した。石器は両地点とも各住居跡覆土・床面から出土したものである。

### A 土器

#### 第1群土器 (第7・9・10・11図 図版23~25)

1類 半載竹管による絹線を描く土器である。

a (3・5・6・8~11) 2条の平行線による鋸齒状を描く。胎土は石英粒と砂粒が多く混じり、繊維を含まない。器面はザラザラとし焼成は良くない。(8・9)は口縁破片でやや外反し、口唇部から縱走し鋸齒状になる。胴部は地文が斜縦文になり不整に縱走(3)するものと、横走(5)するものがある。(11)は口縁部で地文をRLの縦文で、斜縦位的に区画している。(6)は地文が無文である。色調は(6)が黒褐色で、その他は暗褐色を呈している。

b (37~45~47) 2・3条の平行曲線となり波状を示している。(37)は口縁部破片で補修孔があり、口唇直下より5本の平行線が横走し、間隔のない波状地文が横走する。(45~47)はやや間隔があり、(45)は口唇部より縦に陰帯がみられ棒状工具で刺突している。口縁はいざれも波状口縁となる。胎土は石英粒・砂粒が混り、色調は暗褐色・褐色で、焼成

が良く堅い。(46)の器面裏にカーボンが付着している。

c (4・30・35) 半歳竹管・ヘラ状工具の先端部を持ち、格子目状の沈線になる。(30)

は口縁部破片で、半歳竹管によるもので口唇部に押しつけている。胴部破片(30・35)はヘラ状工具を使用している。胎土は繊維を含まず、色調はいずれも黒褐色を呈し、焼成が良い。

b (13・29・61) ヘラ状工具の先端部を利用し、2・3条の平行沈線を描いている。いずれも地文が斜繩文となり、(13)でRL・(61)でLRとなり、(29)は無筋のIrでさらにS字状連續文を施している。色調は褐色で、焼成が良く胎土に繊維を含まない。

e (19・22・27・59・60) 半歳竹管の外側を利し、2・3条の太い沈線を施している。口縁部破片で、(22・24・26・27)は内窓し、口唇部から隆帯を縦に貼り付け、竹管で刺突を施し、(24・27)、2~4条の平行沈線を有している。(19)は口唇部下から2条の沈線である。格円状に溝書きを描いているものに(22・26・59・60)で、(25)は半歳竹管の内側を使用し斜備文状となり、口唇直下に円形竹管の刺突を有している。地文は斜繩文(19)でIrの無筋(22・24)でLRの単節と(23・25)でRLの単筋となり、S字状連續文を施すものに(26・27・59・60)である。胎土は石英粒・砂粒が多く混り、若干の雜維が含まれ、色調は暗褐色・黒褐色を呈し、(22)を除くと焼成がよく堅い土器である。

## 2類 半歳竹管の先端部を使用して、刺突・押引文を主体とする土器である。

a (2・18・48・55) 刺突による、いずれも口辺・口縁部破片である。

(48)は波状口縁を呈しほば直立する。口唇直下で半歳竹管で上と下から突き刺すように、連続して施している。地文はLRの原体を使用する木目状捺糸文となる。(55)はやや内窓する波状口縁で、円形竹管を縦の方向に3個刺突している。地文をRLの斜繩文となっている。いずれも色調は暗褐色で、石英・砂粒を多量に含み、繊維が混入させない胎土となり、器面はザザラとして焼成は良くない。(2・18)は不定形となり、流れるように描いている。

d (31・34・49・58) 半歳竹管の内・外側を使用して押引文となり、連続的に描いている。外側を使用するものは(52)で、器壁がやや厚く平縁となり、間隔をおいて施している。内側で施していくものは、(32)で口縁部が内窓し、平行沈線を描き口唇直下で下から突き刺すように縦方向となる。(33・34・50・51・53)はいずれも口唇破片で、やや内窓して、(34)で口唇部に貼り付けの隆帯となる。これらは口唇直下で施され、やや間隔がある。(53)は太い平行線の間に施している。(36)で内側を使用した3条の沈線の下に、間隔のないように連続している。(49)では間隔があり、(54・58)で間隔がなく器面に鋭角的に施している。(31・

56)では太い竹管を使用している。地文RLの斜繩文なるものが多く、(31)で無筋となる。

胎土は砂粒・石英粒が混り、(52)で繊維を含む、色調は黒褐色・暗褐色を呈している。

## 3類 (17・62・66) 貼り付けによる隆帯を施している。

口縁部破片で、ほとんどが波状口縁となり(17)は横走し直線的になり、(62・66)では口唇部から貼り付け、縦方向のみになっている。縦方向から延る隆帯が直交するように、横走するもの(63・64)と口縁部に沿って波状となるもの(63)とがある。地文がS字状連續文(62~65)とLRの斜繩文(66)になる。胎土には繊維は含まず、色調は暗褐色・黒褐色を呈し、やや焼成が良い。

## 4類 捺糸・不整の捺糸になるものを、器面に施すもの。

a (54・67~70) 莢形状になる捺糸文である。

口縁部破片は、(54・67)で器壁が薄く、(68)では口唇直下で丸味をもっている。(67)は口唇部より斜稜位になり、さらには横走している。(69・70)は胴部破片である。繩文原体はLRを施しているものはほとんどである。胎土は砂粒・石英粒が混り、繊維が含まれず色調は暗褐色を呈し、焼成のよい土器である。

b (71~74) 網目状の捺糸文を施している。

c (20・21・75~78) 不整の捺糸を施している。いわゆるS字状連續文である。

口縁部破片は、(20)で口唇部がやや外反し、(75・76)はやや内窓いいずれも器壁が薄く、平縁を呈している。無筋になるものは(20・79~81)で、単節は(21・75~78)で、横走するもと斜(75・77)のものがある。色調はいずれも黒褐色を呈し、(76・81)は焼成が良い。

## 5類 斜繩文を基張とする。ループ文・羽伏繩文を主とするもの。

a (82~83) ループ文である。

(82)は口縁部破片で、口唇部がほぼ平らで、口唇直下から施している。(83)は口唇部がやや外反し、口唇直下2~3mm下から施している。(83)は胴部破片である。繩文原体はいずれもLRを施している。胎土は砂粒・石英粒を含み、繊維を多量に含んでいる。焼成が良く堅くなっている。色調は(82)で黒褐色、(83・84)で褐色になる。

b (15・16・85~87) 斜繩文・羽状繩文となる。

(16・85)は斜縁で(16)が複節となっている。羽状繩文は(15~87)で、(15)口縁部破片で、口唇部が丸味もやや外反し、口唇直下5mmで結束がみられる。(86・87)は胴部破片で、羽状が3段にみられる。色調は暗褐色・黒褐色を呈する。焼成は良い。

## 第II群土器 (第13・16・18・19・21・26~28図 図版26~34)

縄文中期の磨消文系の土器群である。文様は、C字状文・S字状文・楕円文等の磨消繩文他・斜繩文・撚糸文等である。器種は鉢形を基本として深鉢・鉢・浅鉢・台付鉢・注口・壺等各種に及ぶ。一般に暗褐色を呈し、灰褐色・赤褐色等のものが混じる。朱塗りのものもみられる。胎土には石英等の砂粒を含まれる。概して器面はよく調整され、研磨される。

### 1類 沈線による磨消繩文を有する土器である。

(68・91・92・108・111・112・115・116・118・120・125・131・135・137・143~148・150~152

154~155・159・162・163・166~167)

器形は平らな口縁が上に開き頸部でゆるくしまる胴張りの深鉢・鉢の上に大きく開く浅鉢、そして壺がある。深鉢は口縁の外反するものが殆んどであるが、内寄するものもある。色調は殆んど暗褐色・灰褐色である。胎土には石英等の砂粒を含むが、焼成も良く、器面はよく調整され、研磨されている。

磨消繩文には楕円文・C字状文・S字状文等があり、施文技法は一般にいわれる磨消繩文技法と異なる。施文部分の研磨—沈線による区画—区画内の繩文による充填—沈線による再調整という施文順序をもつ技法である。沈線は太めの円錐状工具による。繩文はL R 単節繩文が多く、R L 単節繩文・複節繩文もみられる。回転方向は地文以外一定しない。文様のモチーフも縦・横の両方にわたり、多様な内容をもつ。細分できる。

#### a 縦位の長楕円形を有するもの (147)

147は縦位の2・3条の沈線によって縦位に集約され長楕円文を有する。繩文は長楕円にのみ施され、その他の沈線間は無文研磨されている。6号住居跡床面および42号土壤等で出土している。

#### b 楕円文がくりかえされるもの (125・144・150・151・167~)

小破片のみで詳細不明。口縁の内寄する深鉢およびミニチュア壺である。(144・150) のように二重沈線で区画するもの、(150) のように刺突文で沈線区画内を充填するものがある。(167) のように無節繩文のものや(125・150) のように複節繩文のものもある。(167) はミニチュアである。内口する口頭部の溝に小孔が5個穿けられ、楕円文が展開している。(3・6・7) の各号住居跡床面・配石遺構より出土している。

#### c 縦位のc字状文を横位にして展開するもの (88・111・112・120・143・145・146・154・163)

C字状文・S字状文は共に縦の集約を離れ、やや豊かなカーブを描く。平縁の外反する深鉢・深鉢でテビカルである。(163) はS字状文の末端咬合による横への変化を示している。(12~120) は繩文の代わり細い櫛描文を充填している。器面はよく調整研磨されている。(163~

4b 号住居跡複式炉内理設土器である。6号住居跡床面および配石遺構等より出土している。

#### d 区画された口縁文様帶のc字状文・s字状文等を横沈線で区画しているもの (91・159・162)

(162) は、テビカルである。S字状文を横にくりかえし、その上下を交互にめぐって横走する沈線は、縦のS字状文を横へ変化させるムードをもっている。また口縁部文様帶と体部文様帶が沈線で区画されているもの特徴的である。さらに口縁の磨消繩文と体下半部の地文との構文施文技法の違いは明瞭である。(162) は4b号住居跡複式炉内理設土器である。2号住居跡土器からも出土している。

#### e 横長のc字状文・s字状文は渦巻いたりを展開するもの (92・108・111・118・~119・148)

一般にC字状文・S字状文は渦巻いたりするものもあるが、大きくカーブし、上下に圧縮される傾向をもつ。口縁は外反する。文様は大柄である。(111) は先端がやや渦巻く。(118~119) は横に扁平化された感じである。4号住居跡床面・7号住居跡床面等より出土している。

#### f 横走する繩文帶よりのびる波頭状文を有するもの (166)

口縁部文様帶と体部文様帶は磨消文により区画される。口縁部文様帶に波頭状文が施されている。口縁部文様帶と体部文様帶の繩文の施文技法は異なる。平縁の内寄する深鉢・深鉢である。(166) は2号出土のものである。4a号住居跡複式炉内理設土器等がある。

### 2類 隆帯を施した沈線を加えて施文する磨消繩文を有するもの。

(89・90・93・96・104・109・110・113・114・118・117・121~124・131~133

器形は、平らな口縁が外反し頸部でゆるくしまる胴張りの深鉢・波状口縁のキヤリバー型の深鉢、平らな口縁の内寄する浅鉢等がある。磨消繩文には楕円文、C字状文等がみられる。磨消文部分がもうあがつたり、凹帯になって沈線の外側を隆線で囲むなど隆帯による特色がみられる。第1類とは異なるムードがある。磨消繩文の手法は、第1類と同じ沈線区画内に繩文を充填させる技法である。繩文原体は始んど単節である。色調は赤褐色のものが多い。朱塗りのものもみられる。

#### g 口縁に渦巻文・円文を有するもの (98・136・142)

隆帯は口縁を中心して下半に及ぶとみられ、口縁の隆帯は厚い。器形は、波状口縁のキヤリバー型と考えられるが、詳細不明。口縁の波頭部の隆帯には渦巻文・円文が陰刻される。渦巻文は渦巻の痕跡をわずかにとどめるものである。他は縦位の長楕円文を展開している。(98) は刺突文で充填された楕円文がみられる。刺突は円棒状工具を斜位に用いた

ものである。2号住居跡・6号住居跡の覆土より出土している。

b 带状磨消繩文を有するもの (122~124)

隆帯に沈線を加え繩文を施し帶状磨消繩文を施している。無文部分が研磨されるとき隆帯が削られ、隆帶繩文となっている。断片的で詳細不明であるが、帶状磨消繩文はやや曲線的であり、縱方向に走るとみられる。4号住居跡床面より出土している。

c 字状文・精円文を有するもの (90・101~103・110・113・116・121・131・131・160)

器面をおおう隆帯の中に文様が施されること、磨消繩文の区画沈線の周囲が隆線状になるとが特徴である。口縁が平縁で外反するが、ほぼ直立に近くなるようである。深鉢の口縁は内弯する。110・121・131~133のように横に扁平化された幅広い文様が多くみられる。4a号住居跡複式炉内裡設土器・3号住居跡複式炉内裡設土器等がある。

d 隆帯文による磨消繩文を有するもの (89・93・99・104・139・140・164~165)

隆帯の一部が文様化し、奔放に展開する気配をみせ、磨消繩文の繩文を地文化させる傾向をもつこと、区画沈線を失なう傾向をもつことなどが特徴的である。器形にも特色があり、深鉢では口縁外反しが体部上半の張った器形である。淺鉢では内弯する口縁の先端口刃を外傾させる。口縁は波状口縁である。波状の頂部には渦巻き風の文様を施している。(99)は浮彫り風、(140)は丸窓風、さらに(164)は渦巻風の楕状把手で、いずれも円孔を意識している。隆帯文にも、(93・99・104)のように凹状隆線で先端がヒレ状になるものや(89・139・140・164・165)のように板状隆線文になるものがある。いずれも隆帯文が交差するとき重なり合う部分がみられる。(164~165)のように横に扁平化された精円文を残すものもある。朱塗りのものがある。3号住居跡床面、2号・4号・6号の各住居跡覆土より出土している。

第3類 (94~96・105・126・127・138・135・154~158・161)

繩文を有する土器、器形は、波状口縁もしくは平縁の器高の高い深鉢・浅鉢・台付鉢・注口がある。一般に第1類・第2類に位べて粗製である。しかし、器面が比較的よく調整されしっかりとしたものも若干含む。口縁部が磨消されているものはよく研磨されている。胎土には石英等の砂粒を含んでいる。出土量は多いが、遺構内出土のものは少ない。

a 口縁部分が磨消されているもの (138・153・156)

殆んど単節の斜繩文でおおわれている土器があるが、口縁部のみ無文研磨されている。繩文は縱位回転施文である。L R 単節のものが多い。器形は、平らな口縁が内口・直立・外反する深鉢、平らな口縁が外反し「く」の字形に頸部でくびれる浅鉢・台付鉢・注口がある。注口は浅鉢の頸部に注口部をつけた感じのものである。一般的に厚手で、黄褐色、赤褐色

ものを呈する。6号住居跡等で出土している。

b 全面繩文を有するもの (94~96・127・157・158・161)

平縁のやや外反する深鉢、波状口縁の内弯する鉢などがみられる。繩文は殆んどL R 単節の横位回転施文のものである。一般に口唇が肥厚気味で、(157)は頗著である。(126)のように口縁部に方向を異ならせて繩文を施すものは少なくない。(94)は全面に行われている。器面は比較的よく調整され、薄手のものも相当ある。(94)は波頂部の下に孔を穿っている。補修孔もみられる。

c 搢糸文を有するもの (149)

極く少量出土している。いずれも小破片で詳細不明。薄手のもののが殆んどである。器面調整も良い方である。(149)は単節の撢糸によるものである。7号住居跡床面等で出土している。

底部 (97・106~107・128・168)

底部資料は多量出土しているが、体部に結びつくものは完形土器のみである。完形土器よりみると、一般に立ち上がりが急であり、地文の繩文が施されず、磨かれているものが多い。大半が無文底で、中央がやや凹む傾向を有する。

第1土器類の底部は、薄手で小形のものが多く、無文もしくは縱位施文の繩文がみられる(106~107・162・166)。よく研磨調整されている。第2類土器の底部は、第1類と殆んど同じであるが、横位施文の繩文がみられる(97・164・168)。第3類土器の底部は、やや厚手で大きいものが多い。しかし、類別できない底部には、第1類・第2類と同じ様な本類の底部も相当含まれるであろう。

無文底の他に木葉痕を有するものも相当あるが、厚手のものに多いようである。

土製品 (第18図129・130図版34)

土製品は二点のみ出土している。いずれも4号住居跡床面出土である。二種類ある。

(1) 円板状土製品 (130)

磨消繩文を有する第1類土器の破片を利用したので、不整円形に研磨整形されている。薄手の無文部分を用いている。暗褐色を呈する。大きさは5×4 cmである。

(2) 三角土製品 (129)

弯曲しているやや厚手の土器破片を三形に研磨整形したものである。単節の斜繩文。を有する土器破片を用いたもので、赤褐色を呈している。大きさは長辺9 cm×高さ6 cmである。

## B 石器

此度の調査により得た石器は、A 地点整理箱28個・B 地点整理箱10個の計38個の及ぶ。発掘面積比を考慮すれば、B 地点に比べてA 地点が圧倒的な出土量である。概してA 地点は打製石器・磨製石器ともに多量であり、B 地点は打製石器が著しく少ない。この傾向は遺構出土のものに限っても同じである。

石器の種類は、A 地点が石鏃・石匙・範状石器・石錐・磨石・凹石・石皿等で、B 地点が石鏃・石匙・範状石器・石錐・磨石・凹石・石皿・磨製石斧等である。

石器の材質は、A 地点・B 地点ともに同じである。打製石器では、殆んど珪質頁岩の硬質のものである。磨製石器では、大半が安山岩で花崗岩・流紋岩等を若干含む。殆ど本地方周辺の石材とみられる。

以上のうち遺構内出土のものについて概略を述べるとしよう。

### A 地点

#### 石鏃 (第29図 1～3 図版35)

石鏃は多数出土している。全て硬質の珪質頁岩である。大きさは、2～4 cm程度で大小ある。部分欠損のものが多い。基本形が二等辺三角形の底辺が内湾する。無基のものである。大きいものほど高きの底辺に対する比が大きく、細長くなる。一般に厚さが薄い。(1～3)は剥片を加工してつくったもので、(3)のように剥片のバルブの方向に先端をつくったものが多い。側辺には、(1・2)のようにノッチを入れたものもみられる。

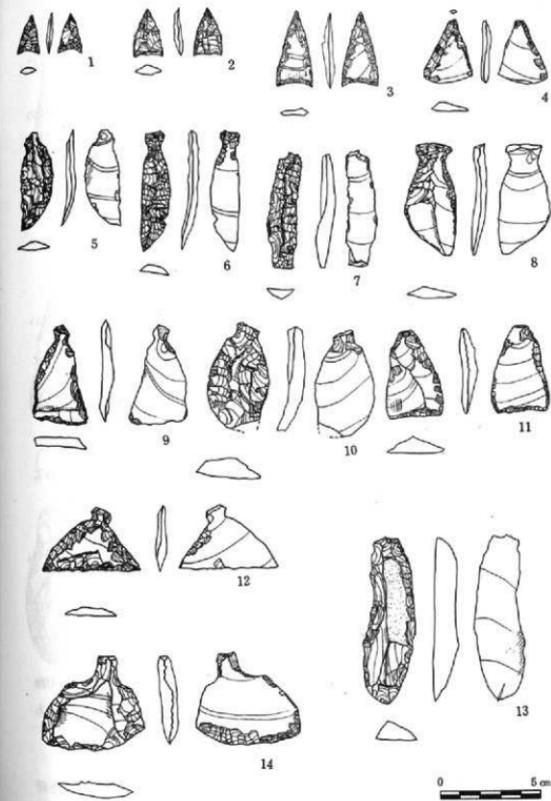
#### 錐石 (第29図4 図版35)

石錐とみられるものが若干ある。材質は珪質頁岩。剥片を加工したもので、つまみ部分の周囲と先端が二次剝離で加工されている。(4)は先端が根本より欠損している。2号住居跡床面出土である。

#### 石匙 (第29図 5～12 図版35)

石匙は多数出土している。とくに2号住居跡出土のものが多い。いずれも第一次剝離面のバルブの方につまみをもっている。形態的には、縦形と横形に分けられる。

縦形のものは縦長剥片に二次剝離で調整加工したものである。(5～8)は半月形のナイフ形の形状を呈し、主軸方向に沿う刃部を有する。(9～11)のように横形で主軸方向に直交する刃部を有するものもある。横形のものは横長剥片に二次剝離で調整加工したものである。いずれも主軸方向に直交する刃部を有する。(12)のように刃部が直線的なものと(14)のように刃部が弓なりに突出しているものとがある。(6・7)は刃部に欠損がみられる。



第29図 A 地点住居跡出土石器

### 箆状石器 (第29図13~17 図版35)

箆状石器は多数出土している。とくに2号住居跡出土のものが多い第一次剥離面のリングの方向に刃部をもつものが多い。縦長剥片に二次剥離を加えており、形態より二つに分けられる。

(13~15)は細長い半月形状を呈し、刃部が先端部側辺にある。(16~18)は捷状の形態を示し、刃部が先端部にある。いずれも厚手で、刃部周辺に高まりを持ち、かまぼこ型の断面形を呈している。機能的には前者と後者とで区別されるべきである。材質は硬度の硅質頁岩である。(17~18)の裏面には使用による破損がみられる。

### 凹凸 (第30図27~31 図版36)

凹凸は極めて多量に出土している。とくに2号住居跡出土のものが多い。二つに細分できる。材質は安山岩とみられる。

#### a 自然石に凹穴を有するもの (27~29)

(27)は片面に、(28)は表裏両面に、(29)は三面に凹穴を有する。凹穴は細長い確に複数施される。欠損品が多く、敲き痕の認められるものもある。

#### b 磨石に二次的に凹穴を施するもの (30~31)

横円形の石けん状に磨かれ、扁平化した磨石の両面に凹穴を二次的に施している。凹穴の断面がロート状である。

### 磨石 (第30図33~35 図版36)

磨石は多量に出土している。とくに2号住居跡出土のものが多い。材質は安山岩とみられる。形状より二分できる。

#### a 横円形の石けん状に磨られているもの

厚味のもの、薄味のもの種々多様である。二次加工されて凹石に用いられるものが多い。

#### b 断面が隅丸三角形の棒状のもの (33~35)

いずれも断面三角形の棒状石を適當な長さに折って、磨っている。(35)のように側面を整えるための剥離を施してあるものもある。

### 線刻標 (第30図32 図版36)

横円形の扁平な自然石に10本程の線刻がなされたものである。線刻は、先端が鋭い刃物によって行なわれらしく断面形が三角のものである。線刻の方向は横円の長軸方向であり、角度を不規則にして何度も行っている。2号住居跡より1点出土したのみ。

### 錐状石製品 (第30図36 図版36)

扁平な舌状の鍼をおもわせる形態である。1方につまみ状突起部を有する。けずりと研磨によって整形している。つまみの方より舌状端にむけて鋭利な刃物で線刻を施している。



第30図 A、B 地点住居跡出土石器

A 地点 15~18・B 地点 19~26

線は無数といってよい程規則性がない。但し方向のみ大体同じである。材質は砂岩で、色調はうすい緑色をしている。1号住居跡出土の1点のみである。

#### B 地点

**石匙** いずれも4号住居跡出土である。(第30図19~21 図版37)

第一次削離面のバルブにつまみを有し、形態的には横形(19)のものステップフレイキングによる片面加工で、長軸方向に直交する刃部で、二次削離で調整加工をしたものである。縦形は(20・21)で、(21)はつまみの部分が欠損し、フレイフレイキングによる片面加工で、長軸方向に平行して刃部があり、第二次削離で調整を加えている。形は半月状を呈している。

**貧状石器** (第30図24~25 図版37)

(24・25)は4号住居跡、(23)6号住居跡、(22)7号住居跡から出土している。

いずれもフレイフレイキングによるもので、上部で打面が認められ、第一次削離面のバルブに調整が加えられ、長軸方向に平行して刃部があり、第二次削離で調整が行なわれている。(25)は上部が欠損している。形態はいずれも溝鉗形をなし、(23)は左右対称となる。断面形は(22~23)で半月状になっている。

**石錐** 3号住居跡床面より出土している(第30図26 図版37)

針部・基部が欠損し、両面加工を施し、長軸に平行して密に周縁削離調整を加えている。断面形は菱形を呈し、形は棒状をなしている。,

**磨石** 6号住居跡より出土。(第32図37・38)

球状を呈し、全面を磨り、(38)は自然の凹がみられる4・6号は住居跡内より多量に検出された。

**凹石** (第32図39~40 図版37・38)

(39)は配石造構、(40~42)は4号住居跡から出土したものである。

(39~41)は磨石を二次使用したもので、楕円・不整椭円形を呈している。(42)は長椭円形を呈し、(41)と同様に深く凹でいる。断面が比較的扁平なものが多い。

**石皿** (第32図43、図版38)

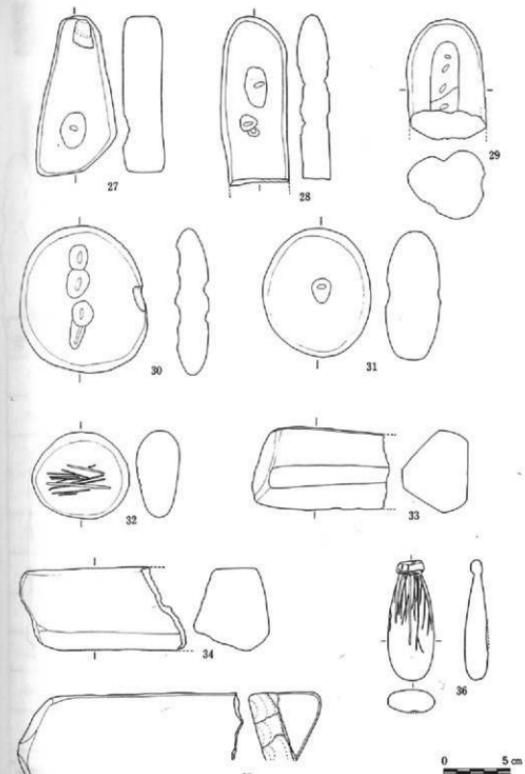
4号住居跡より出土したものである。

皿状の凹みを持つ石皿の破片で、両側面が良く磨耗され、裏面にも磨耗面がみられ、皿状の凹みは平坦で、中心部にかけて良好に磨耗されている。

**石棒** (第32図44、図版38)

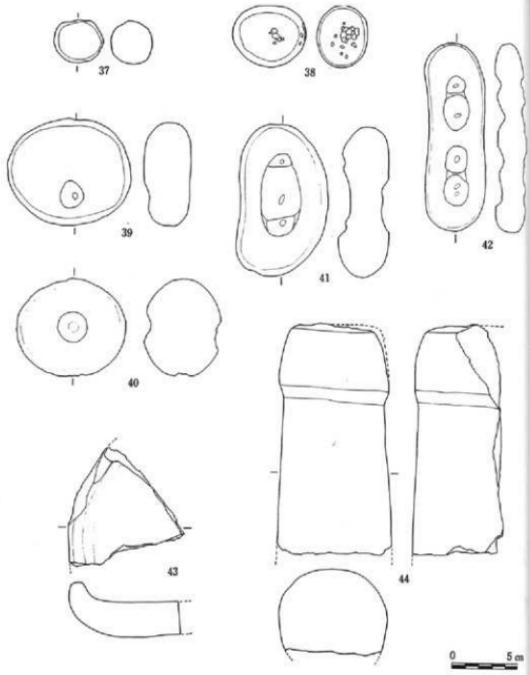
3号住居跡床面直上より出土した。

材質は流紋岩で、頭部と側面の一部が破損している。全体的に良好に磨耗され先端部が平

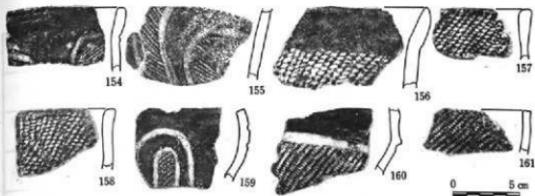


第31図 A 地点 住居跡 出土石器

らになり、断面形が円形を呈すると考えられる。この他3点出土している。



第32図 B地点 住居跡、出土石器



第26図 B地点 配石・列石造構出土土器

配石造構 154～157

列石造構 158～161

0 5cm

小林遺跡 土壙一覧表

土壙番号	平面形	長×短(cm)	深さ(cm)	種別	主軸方向	備考
4	楕円形	130×100	23	A	N-28°-W	
6	不整円形	120×118	20	A		西壁付近壙底に一括土器を有す。
8	楕円形	130×120	75	A	N-8°-E	壙底に自然礫を有す。4Jより新
9	円形	95×90	30	A		覆土中より炭化物(クルミ)が出土 10Pより新
10	楕円形	140×85	110		N-2°-W	4Jより旧 壙底にピットを有す。 時期は中期以前
11	円形	90	88	A		東側は未調査で不明 16Pより旧
14	楕円形	150×120	30	A	N-42°-W	壙底に3個のピットあり。
15	円形	80×70	59	A		
16	楕円形	150×95	34	A		
17	楕円形	153×140	44	A		
18	不整円形	112×85	34	A		

19	不整円形	103×90	28	A		
20	楕円形	123×104	27	A		
21	不整円形	100×90	22	A		壇底に自然礫を有す。
28	不整円形	90(長)	62	A		東側は未調査で不明 6Jより新
29	不整円形	73×60	35	A		
30	長椭円形	167×112	60	A	N-7°-W	壇底部に大形土器片が出土 7Jより新 30Pより旧
31	不整円形	79×65	30	A		
32	円形	100×102	50	A		
33	楕円形	124(短)	40	A	N-7°-W	東側は未調査 PⅤより新
34	不整円形	127×124	53	A		壇底部より大形の土器片が出土 30Pより新
35	楕円形	125×124	56			壇底中央部にピットが存在
36	楕円形	110×100	57	A		壇土中に小礫が多い 2Jより新 PⅤより旧
38	不整円形	80×60	52	A		
40	隅丸方形	97×85	30	B		壇底部が起状に富む。
41	長椭円形	106(短)	43	B	N-34°-W	北側にピットを有する。42Pより新
42	不整円形	118×110	32	A		
43	不整方形	162×65	69		N-24°-W	4Jより旧 人為的に埋めている。

(注) 欠番号は本文中に説明を加えた。

種別については、土壤質土の相違により分けた。

A—黒褐色土 深土プロック・稲子を多量に含む

B—褐色土 黄褐色粘土粘子・プロックを多量に含む。

## IV 総括

今回発掘調査した小林遺跡は山形県中央の東部にあり、乱川原状地の扇央部に位置し、扇端部では縄文時代中期・晚期の遺跡が偏在(第1図)している。さらに西部へ行くと、最上川が流れ、縄文時代後期から晚期の遺跡が集中し、県内での原状地形における遺跡立地・分布の一特徴を示している。

小林遺跡は、原状地の小河川に運ばれ堆積した微高地に立地し、広範囲に亘って縄文時代前期と中期の遺物が散在し、遺跡西部から中央部にかけて前期があり、中央部から東部にかけて中期が認められる。西部をA地点、東部をB地点とし、本報告書はそのように記載した。

**A 地点** 縄文時代前期中葉の住居跡2軒・土壙3基、土器・石器が多量に出土し、南東部の包含層から縄文時代中期大木10式の土器を検出した。

**B 地点** 縄文時代中期後葉の住居跡8軒・土壙43基・配石造構1・列石造構1から成り立つ集落跡である。なおB地点発掘区北側の包含層で縄文時代前期の土器片を検出した。

このように、小林遺跡は縄文時代前期と中期が複合する時期であるが、未調査の部分が多く、集落跡の全貌を解明するには至らないため、詳細は不明であり、事実の結果をまとめるに留めたものである。

### (1) A 地点の造構について

住居跡は2軒検出され、1号住居跡は円形を呈するが、不明のピットが重なり合いその構造は不明である。2号住居跡は長方形を呈し大形で、少なくとも2回以上の拡張を示しており、構造的には、中央東側寄りに比較的大きい主柱穴が直線的に配列され、拡張時に柱の移し替えが行われ、壁の周りにも柱穴が認められる。押は少なくとも2基使用されたと考えられる。また、覆土上部で焼土が帯状に混入され、多量の遺物が出土し、住居跡埋没過程で二次使用が行われたと考えられる。

土壙は、いざれも楕円形を呈し、覆土上層で多量の焼土・炭化物が認められ、それに混じて骨片・粉が検出されている。骨片については、鑑定の結果中形哺乳動物と判明している(註1)。

このようにA地点での造構の存在は、1号住居跡が縄文時代前期大木3式、2号住居跡2・3号土壙が縄文時代前期大木2式で、1号土壙は大木3式の所産であり、大部分が未調査のため集落跡の全体的な構造は不明確であるが、縄文時代前期中葉において大形の住居跡が出現することは、東北地方では秋田県柳沢遺跡の発見例が知られている(註2)。

また、住居跡・土壙の形態的な類例は宮城県今野熊谷遺跡に共通している(註3)。

## (2) B 地点の遺構について

**住居跡** 本地点の住居跡は、6～10mの間隔で散在し、平面形がほぼ隅角方形・多角形・円形を呈し、規模は径約3～5mで小形と中形のものである。主柱穴は3～5本で住居跡の形に沿うように方形に配され、4・6号住居跡で埋め戻した痕跡が認められる他は、單一の時間に構築されている。壁柱穴はいずれの住居跡にも検出している。支柱穴は4号住居跡の中央部で、径20cmの柱穴が東西に配列されているのが特徴である。壁溝は2・4・6号住居跡で認められ、2・6号住居跡では2本確認され、拡張したと考えられる。炉跡はいずれも複式炉であり、構築方法の上で4号住居跡は規則的かつ緻密に造られV字形をなしている。2・3・6・7号住居跡では規則的ではあるが繁雑である。炉の位置は住居跡の壁にある。なお6・7号住居跡の複式炉の形態は、ほぼ類似しており、2・6・7号住居跡では二次の使用が考えられる。

住居跡内遺物の出土状態は、各住居跡とも覆土中から概して多量の遺物が出土し、床面からの出土は、床面から数cm浮いて出土したり、炉の上に乗っていることがしばし認められるが、多くの場合、住居跡廃絶後に投棄されたものである。本遺跡では住居跡廃絶時ににおける生活状態を示す好例として、先に述べたA地点の縄文時代前期2号住居跡と、本地点の4・6号住居跡であり、顯著に認められたのは4号住居跡である。

4号住居跡では、住居跡が埋没してゆく過程で、床面と覆土中層まで15～20cmの間層がみられ、次にある時点での住居跡の中層で人為的に火を使用し、それに混在して完形・一括土器と石器および河原石が大量に一括投棄されたもので、短期間にとはい住居跡の廃絶後繼續的に遺物の投棄が行なわれていると考えられる（註4）。

各住居跡の時期は、2・6・7号住居跡が縄文時代中期大木9式期で、3・4・5号住居跡が縄文時代中期大木10式期である。この時期の住居跡の検出例として、福島県本宮町上原遺跡（註5）、同塙沼上原A遺跡（註6）、同田地ヶ岡遺跡（註7）、宮城県長根貝塚（註8）、同菅生田遺跡（註9）、二厘敷遺跡（註10）などが代表的で、縄文時代中期後葉の集落跡である。

**土 壤** 調査の中央部に偏在し、東側から西側の方向に列石遺構に沿うように在る。平面はほぼ円形・椭円形・方形を呈し、規模が径約1m前後で深さ30～45cmである。土壌の相違は、特に覆土の違いによるもので、覆土中に焼土・炭化物が多量に混るものと、覆土中層で黄褐色粘土ブロック・粒子を混るものとがあり、後者は、1・3・39号土壌で平面形が椭円形・方形を呈している。前者は平面形が椭円形・円形を示し、2・5・12・13・25・34・37号土壌が顯著であり、壙底面で、一括・完形土器が出土しているものは2・6・7・22・24号土壌である。覆土中に焼土が混る土壌は、福島県塙沼上原A遺跡で円形を

呈し袋状となっていることが知られている（註6）。

**配石遺構** 平面形がほぼ方形を呈し、北側から東側にかけて石を配列し、遺構内の比較的広範囲に2ヶ所焼土が検出された。柱穴および付属施設は認められない。方向は北東方向になり、南側に直線延長上に直交するように列石遺構がある。時期は縄文時代中期大木10式の所産である。

**列石遺構** 本遺構は、東側から南側にかけて人頭大の石を規則的に配し、半環状的に連なり延びている。東北地方では発見例が報告されていないが、岩手県柳山遺跡（註11）宮城県菅生田遺跡（註9）、二厘敷遺跡（註10）等でみられるように、この時期になると石を配し、一種の呪術・宗教的と判断できる遺構が出現し、縄文時代後期から晩期の呪術宗教形態の変遷過程が、この時間の配石遺構が、母体になると推察され、本遺跡の配石・列石遺構がそのような関連性があると考えられる。

このように、B地点での遺構は住居跡・土壤群・配石遺構・列石遺構からなる。形成される時期は、2・6・7号住居跡が構築され、列石遺構に沿うように、3・4・5号住居跡・土壤群・配石遺構がつくられている。しかし、集落跡の全体的構成は不明確である。

## (3) 土器について

**I群土器** 縄文時代前期中葉の土器群である。この群の特徴として、半纏竹管および棒状工具による、平行沈線文・曲線文・鋸齒状文・刺突文・押引文があり、同時に粘土紐貼付文に刻み目を有し、地文を斜繩文・捺糸文・S字状連鎖文などを施している。また一部の土器は、胎土に纖維を含まない一群である。

1a・b (13) 類土器は、胎土に若干の纖維を含むものもある。文様は地文を斜繩文・S字状連鎖文で、半纏竹管による平行線文・曲線文などになっている。今回発掘調査した区域では、前年度予備調査した北側と比較すると、量的には少ない（註12）。本類は縄文時代前期大木3式に比定される。

1a・b・2～5類土器は、胎土に纖維を含まない割合が多く、器形は、口縁が直行ないしやや外反し胴が張る深鉢形土器と、口縁が内湾しやや焼成の良い浅鉢形土器がみられる。文様構成は、地文が斜繩文・S字状連鎖文で、平行沈線文・刺突文・押引文・粘土紐貼付文及び多種の縄文を用いている。なお、2a類刺突文・2b類押引文との施文法の関連性は、2aで器面に鋭角の角度に突き刺し、2bで鋭角に突き刺し工具を引くと刺突の間隔が広り、それが平行線となって引かれ刺突と平行線の組合せとなって、2aと2bでの施文法の変化が認められる。本類は縄文時代前期大木2式に比定される。

**第Ⅱ群土器** 繩文時代中期後葉の土器群である。磨消繩文を有する一群であり、磨消繩文を有する1類・2類と斜繩文のみの3類とに分かれ、後晩期への変遷を考慮すれば精製土器と粗製土器の関係にあるともいえる。さらに前者は陰唇（縫）の有無により1類と2類に分かれる。この違いは両者の時間的差異を示すものでないことは明らかである。各々は文様のモチーフ・文様帯のあり方等によりさらに二分できるとみられるが、もう一步具体的内容を欠く。

1a・2a類は、中期中葉の渦巻文の名残りをよく留め、文様が縱方向に流れ、文様帯のあり方からみて、明らかに大木9式に比定される。

1b・2b類は、内容不充分であるため問題であるが、磨消繩文のあり方からみて大木9式～大木10式に至る過程のものとみられる。

1c～f・2c～e類は、文様に縱方向から横方向への傾向性がみられ、文様帯が口縫部と体部に分かれる傾向性を有することから大木10式に比定される。

3類は、斜繩文を有するものであるが、aは口縫部の磨消に特色があり沈線をあまり用いない2d類との関係が深そうであり、大木10式に比定される。eは捺糸文であるが、量的に少なく内容が不充分であり、大木9式～大木10式のものと考えられる。

三角状土製品・円板状土製品が各々1点ずつあるが、これらの土器に伴うものである。

#### (4) 石器について

A地点の前期の石器は石軌・石匙・箆状石器・磨石・凹石を主とする組成のもので、器形の定形性・製作技術の安定性等々がみられ、昨年の予備調査報告と同様のことがいえる（註12）。B地点の中葉の石器は石匙・箆状石器・磨石・凹石・石皿を主とする組成のもので、器形・製作技術においてA地点と同様であるが、器種の組成比の差違と石棒・径4～5cmの円盤状石器（用途については不明）等特色ある石器の加わりにおいて特色を見い出すことができる。なおA地点で線刻のある石製品が出ていていることも留意しておきたい。

註1 破骨器の鑑定は山形県立博物館高橋多義氏に御教説を賜った。なお詳説は現在進行中である。

註2 高櫻御跡「秋田市梅沢遺跡発見の往跡」考古学ジャーナルNo.89 昭和49年

註3 宮城県教育委員会「金剛多宝貝」今泉野遺跡調査概報「宮城県文化財調査報告第33号 昭和48年3月

註4 安原千絵二、「可逆透光二重摩ニユータウン透視調査報告書」多摩ニユータウン透視調査会 昭和44年

註5 目黒吉明・丹波宣茂「本宮町上原跡」宮城県教育委員会 昭和45年

註6 目黒吉明・木水光治・梅宮茂「盛岡上原A遺跡」「田地ヶ岡遺跡」「東北自動車道透視調査報告書」

註7 島根県教育委員会 昭和50年3月

註8 伊東徹・進藤勝彦「高根貝塚」宮城県教育委員会 昭和44年3月

註9 丹羽一茂・三浦圭介他「青生田遺跡調査概報」宮城県教育委員会 昭和48年

註10 佐藤・藤原・梅沢「二層構造の土塁」北白川自衛隊道開延長延伸琵琶湖支所観察報告「宮城県教育委員会 昭和46年3月

註11 北上市教育委員会「福那町埋山遺跡調査報告書」「北上市史」第1巻 昭和43年

註12 加藤 俊・佐久島忠志「小林遺跡」東根市教育委員会 昭和50年

#### (付編) 東根市小林遺跡の地質（地層の鉱物成分について）

山形県立博物館 菅井 敏一郎

##### 1 まえがき

小林遺跡の所在地は、東根市大字小林地内にある。今回の調査は、小林遺跡のB地点で、大森山（278m）の北西方約1000mに位置している。

小林遺跡は、畑として利用されている。その表層には、黒色腐植土層が堆積しているが、下層には、黄褐色・褐色の地層が黒褐色の地層と互層をなし、その性質や成因について注目されていた。

筆者は、小林遺跡B地点8-20グリッドの堆積物について、その鉱物成分を検討した。その結果、この遺跡の地層には、紫蘇輝石・普通輝石・角閃石・磁鐵鉄・石英・長石等の火山降下堆積物が認められ、粘土鉱物として、14Å鉱物・10Å鉱物・7Å鉱物等が含まれていることが明らかになったので、ここにその結果を報告する。

##### 2 試料と方法

試料は、小林遺跡B地点8-20グリッドの土層断面を、色・土性などにより8層に区分し採集した。（第33図 図版1）

採集した試料は、各層位ごとに、6%H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>で有機物を除去し、沈殿法により2μ以下の粘土を集めた。分散剤として、0.5N-HCl・0.5N-NH<sub>4</sub>OHを用いた。以上の処理により得られた試料について、X線粉末回折法を行った。

X線回折法は、対陰極Cu フィルタ-Ni、管球電圧35kV、管球電流15mA、Count Range 100cps、Time Constant 1 Sec、Slic 1°-0.2mm-1°、走査速度20mm/minの条件で行った。

粘土分を採取し沈殿した鉱物は、0.1mm以上の鉱物を>0.2mmと0.2-0.1mmに分けた。0.2-0.1mmの鉱物は偏光顕微鏡により観察した。

##### 3 結 果

###### (1) 0.1-0.2mmの鉱物組成

偏光顕微鏡で観察すると、全試料と共に含まれる鉱物は、石英・長石

B 地点8-20グリッド柱状図

層厚(cm)	色調	試料番号	その他
I	黒褐色	1	直徑1cm前後の礫を含む
20			
II	褐色	2	
17			
III	黒褐色	3	
20			
IV	黒褐色	4	
23			
V	黄褐色 褐色	5	遺物を含む
20			
VI	黒褐色	6	
15			
VII	黒褐色	7	更新世の火山灰
25			
VIII	黄褐色		
120			

第33図 B 地点8-20グリッド柱状図

・火山ガラス・紫蘇輝石・普通輝石・磁鉄鉱等が認められる。その含有量は、磁鉄鉱>角閃石>紫蘇輝石>普通輝石であるが、比量 2.9以下の軽鉱物である（図版2・3）

以上の鉱物組成から本遺跡の地層は、新期の火山活動に由来する火山灰堆積物である。殊に各層に角閃石を含むことは、藏王火山起源の降下火山灰でないと考えられる。（註1）

しかも、その降下火山灰の年代は、今のところ不明である。しかし、遺物の年代は、早い時期で櫻井前期の中頃と推定されていることから、火山灰降下の時期は、更新世（洪積世）の古い火山灰堆積後、5000~6000年頃から活動があり、遺物が埋蔵している地層は、遺物の年代と東北地方のそれや火山活動を考慮すると（澤 正雄1974）少くとも4000~5500年と推定することができるのではないだろうか。

そして、それ以後、火山活動が数回にわたって起つたことであろう。それが、どこの火山に由来し、その活動の時期や岩質については、今後の課題である。

## (2) 粘土鉱物組成

X線回折によると、第34図、第35図のように、石英・長石の他、粘土鉱物として、14~15Å・10Å・7Åの各反射が認められる。何れの試料も14~15Åのピークが顕著であり、10Å・7Åのピークは小さい。

14~15Å鉱物は、エチレングリコールで、第I・III・IV・V層は移動し、第VI・VII層は移動しない。300℃加熱では、14Åは減少し、第I・III・IV・V層は、10Åが増大する。10Å鉱物は、エチレングリコールで移動しない。550℃加熱では、各層位の7Åが消滅している。第V層では、14Åのピークが残っている。また、加熱後14Å→12Åに移動し、14Åの小さなピークが残るものがある。以上から判断すると、14~15Å鉱物は、モンモリロナイトとバーミキュライトより成り、10Åは、イライト、7Å鉱物は、カオリンである。従って、第I・III・IV・V層は、モンモリロナイト・バーミキュライトを主成分とし、第VI・VII・V層は、AI-バーミキュライトが多くなる。第V層には、緑泥石が現われている。これに、7Åカオリンとイライトが加わっている。AI-バーミキュライトは、堆積年代の古い風化が進んだ地層に認められている。（増井・庄子1975）

本遺跡の遺物包含層、第VI・VII層には、しばしば赤褐色の遺物が出土する。この試料について、X線粉末回折を行った。X線回折では6Å・4Å・3Åなどの回折線が認められる。これらの中、石英と長石のピークは明らかである。

ただし、4Åには、雲母鉱物と推定されるピークが残っている。以上から、石英と長石が溶解しないで殆んど残り、雲母鉱物が熱せられて、底面反射の変化やその他の粘土鉱物の性質から考えて、おそらく、700~800℃の加熱があったと推定される。しかし、まだ不明の点があるので今後検討していきたい。

## 4まとめ

- (1) 小林遺跡B地点の地層の鉱物は、普通輝石・紫蘇輝石・角閃石・磁鉄鉱・石英・斜長石・火山ガラス等であり、明らかに新期の火山活動による降下堆積物である。特に、角閃石を多く含むことは、この地層の特徴である。
- (2) 本層の粘土鉱物組成は、第I・III・IV・V層では、モンモリロナイトとバーミキュライトが主体であり、下位の地層には、AI-バーミキュライトが多くなる。この他、イライトと7Åカオリンを伴っており、第V層には、緑泥石を僅か含んでいる。
- (3) 本遺跡からの遺物とともに出土した赤褐色の焼土のような破片は、石英・長石と雲母鉱物より成り、700~800℃の加熱があったと考えられる。
- (4) 本遺跡の遺物を包含する地層の年代は、4000~5500年と推定されるが、何処の火山により放出され、飛来したかは、今後の課題であろう。

## 謝 詞

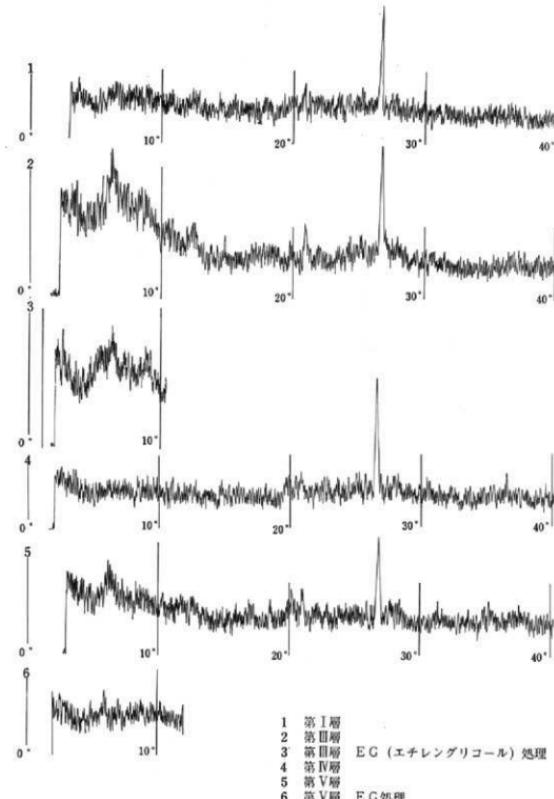
本研究をするにあたり、東北大農学部庄子貞雄助教授・東北大大学院山田一郎氏からは、ご懇切なご指導を賜わり、更に試料の一部をいただき、X線回折図の発表をお許しいただいた。また、東京工業大学工業材料研究所中川善兵衛博士からは、粘土鉱物のご鑑定と貴重なご助言をいただいた。以上の方々に深く感謝申し上げる。

註一 庄子貞雄氏の談話 1975 未発表

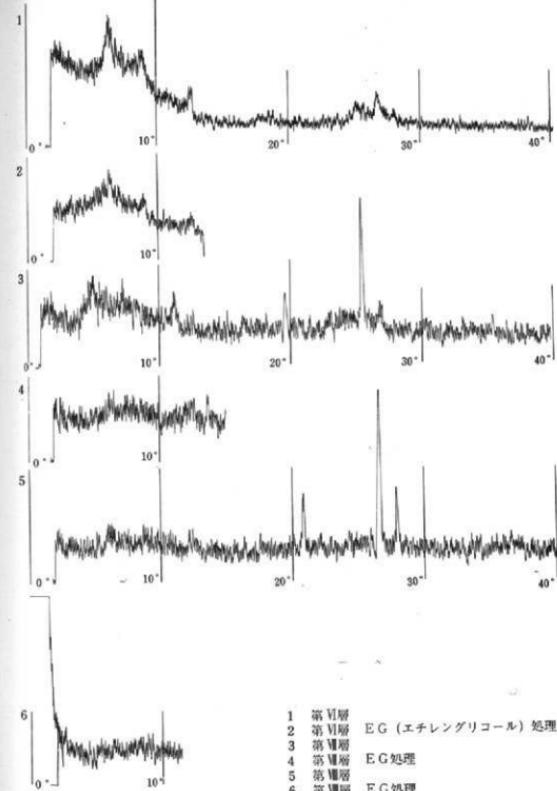
## 文 献

- 増井淳一・庄子貞雄（1975）火山灰土壤の初期風化とその粘土鉱物 須藤俊男教授退官記念論文集 192~197  
澤 正雄（1974）日本の第四系 墓地書館

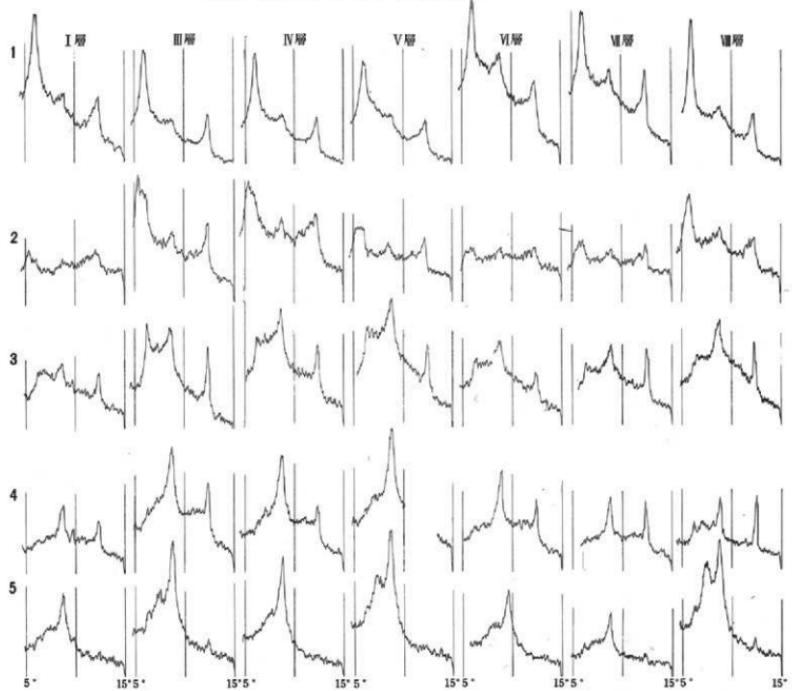
第34図 粘土鉱物 ( $< 2\mu$ ) のX線回折図 (1)



第35図 粘土鉱物 ( $< 2\mu$ ) のX線回折図 (2)



第36図 各処理後 ( $< 2\mu$ ) のX線回折図

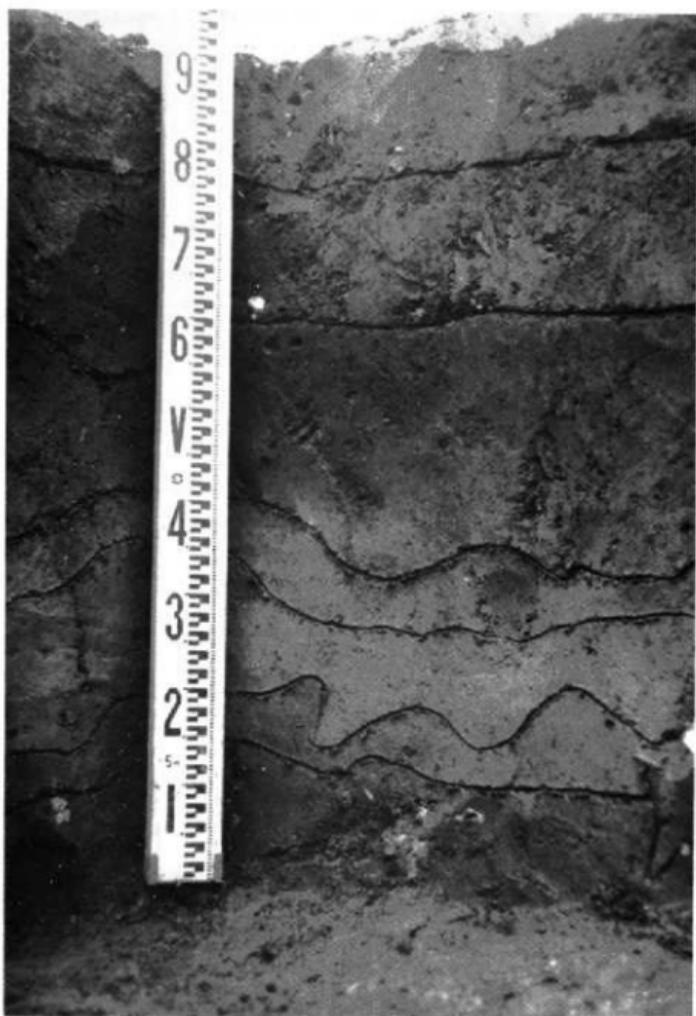


- 1 脱鉄処理 Ca 粘土
- 2 エビレングリコール処理 Ca 粘土
- 3 K 粘土
- 4 300° C 加熱 K 粘土
- 5 550° C 加熱 K 粘土

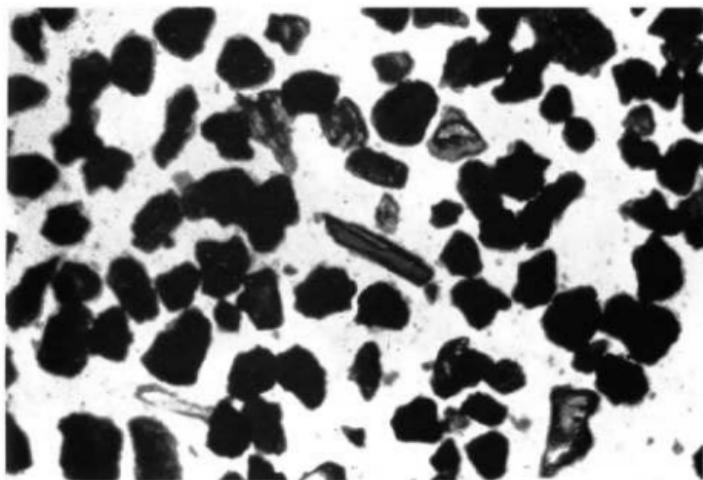
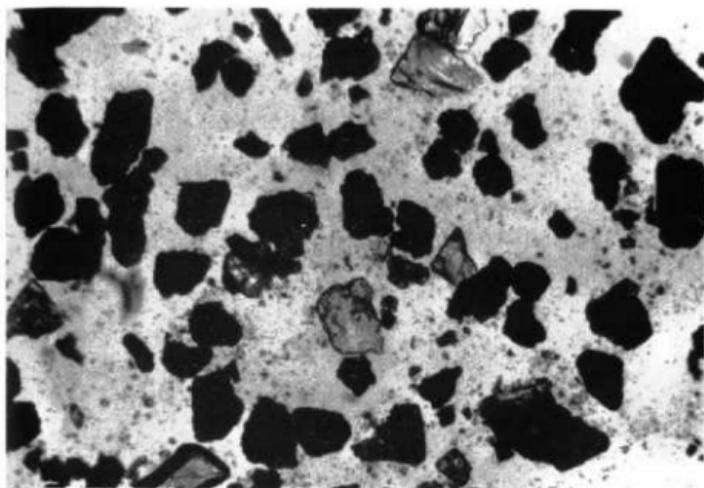
(東北大学庄子貞雄博士 山田一郎氏により作成)

図 版

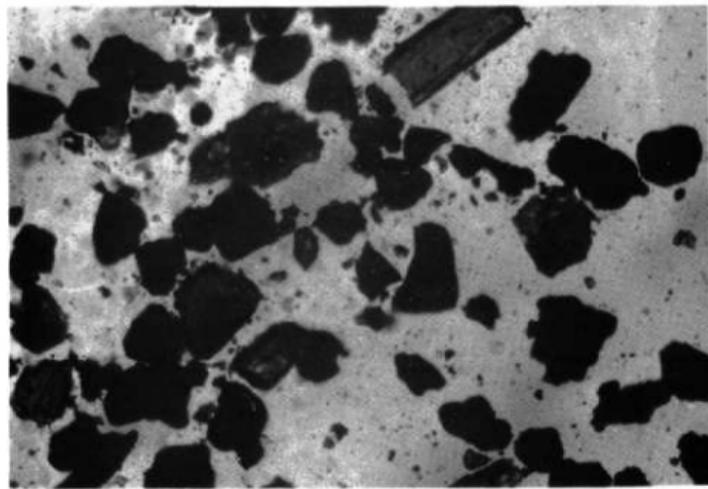
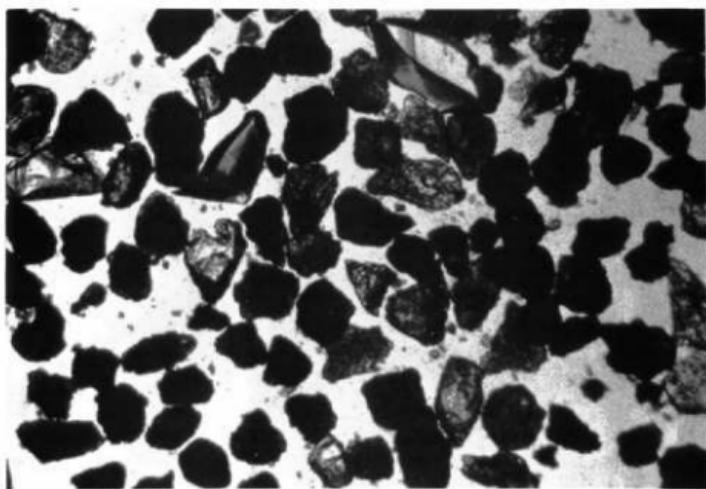
図版 1



B 地点 8-20 グリッド 土層断面



0.1 - 0.2 mm鉱物の顕微鏡写真  
第Ⅱ層 比重  $2.9 > \times 40$



第VI層 比重  $2.9 <$   $\times 40$

遺跡近景（A 地點）E ↑



遺跡近景（A 地點）E ↑

遺跡近景（B 地點）NW ↑



発掘風景（A地点）  
2号住居跡



発掘風景（B地点）  
6号住居跡

発掘風景（B地点）  
4号住居跡



土層断面



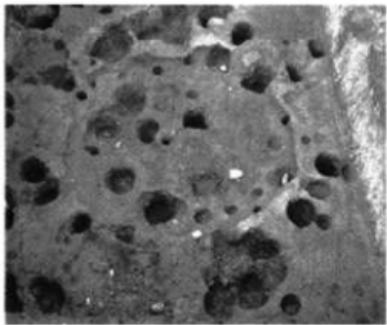
土層断面



遺物の出土状況（石製品）  
1号住居跡（A 地点）



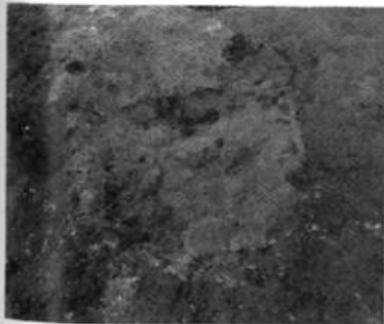
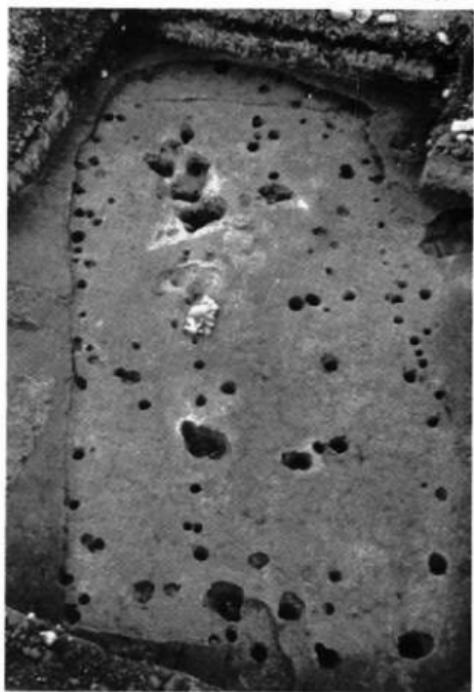
A地点 1号住居跡 S↑



A地点 1号住居跡北側周辺 E↑



A地点 2号住居跡  
発掘状況 N↑

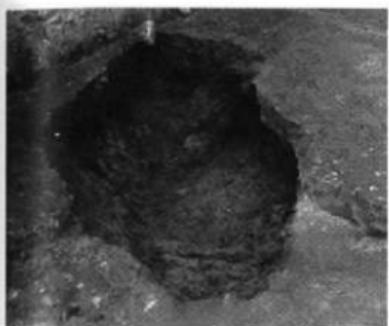


A 地点 2号住居跡内地床炉  
(2F)



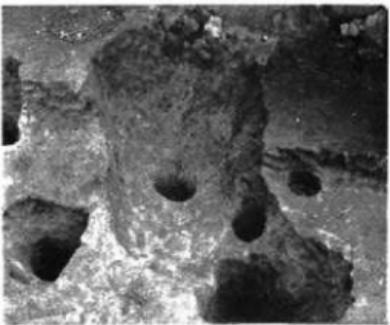
A地点 2号住居内配石

A 地点 1 号土壤 W ↑

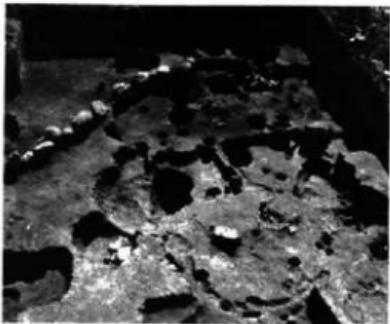


A 地点 2 号土壤 W ↑

A 地点 3 号土壤 N ↑



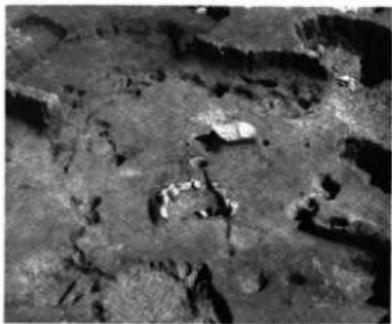
B地点 2号住居跡 N↑

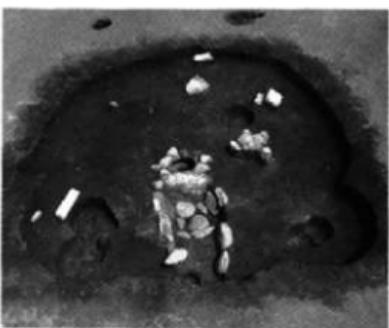


B地点 2号住居跡内複式炉 SW↑

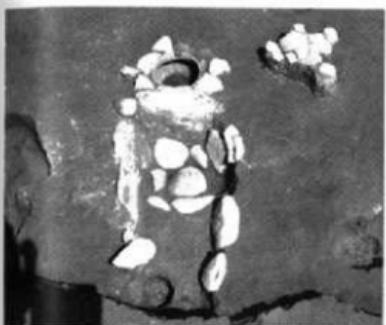


B地点 2号住居跡 SW↑





B地点 3号住居跡 S ↑



B地点 3号住居跡内複式炉 S ↑



B地点 3号住居跡遺物出土状況



B地点 4号住居跡 S↑



B地点 4号住居跡  
覆土内遺物出土状況N↑

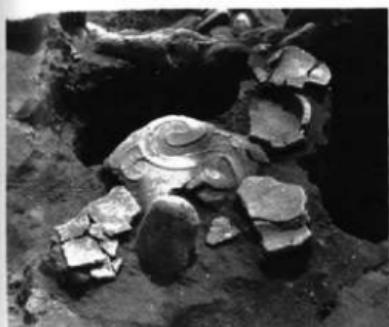


B地点 4号住居跡内土層 S↑

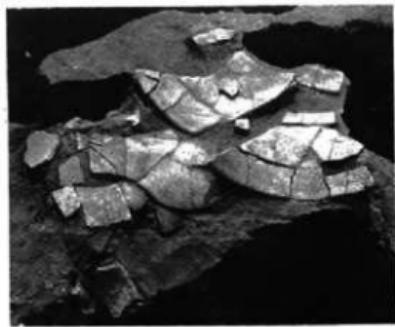
B地点 4号住居跡遺物出土状况



B地点 4号住居跡遺物出土状况



B地点 4号住居跡遺物出土状况



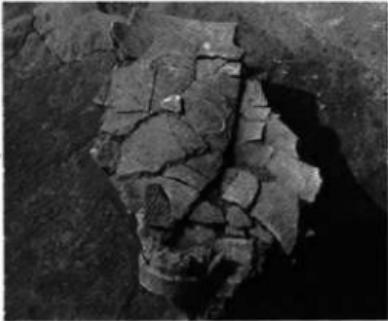
B地点 6号住居跡 S↑



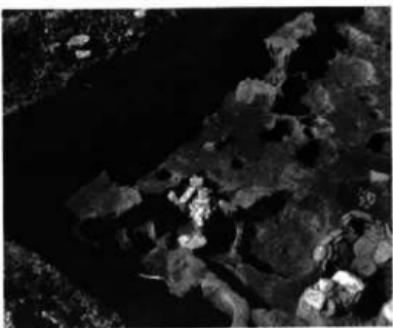
B地点 6号住居跡内複式炉 E↑



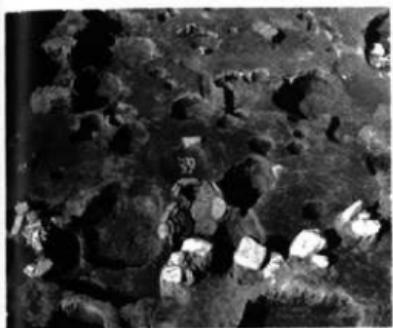
B地点 6号住居跡内遺物出土状况



B 地點 5 號住居跡 S E ↑



B 地點 7 號住居跡 S E ↑



B 地點 7 號住居跡內複式爐 S E ↑



B 地點配石遺構 S E ↑



B 地點配石遺構（南側）  
土層斷面 E ↑



B 地點配石遺構（北側）  
土層斷面 E ↑



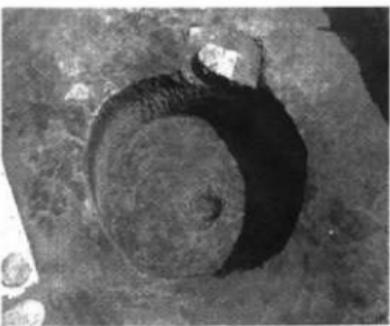
B地点 1号·27号·2号·3号土壤W↑



B地点 3号土壤土层断面W↑



B地点 5号土壤S↑

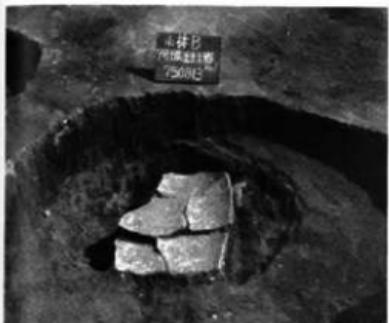


B地点 上：7号土壤  
下：6号土壤 E↑

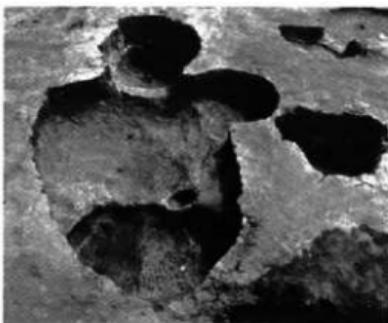


4#B  
炭燒罐  
7500BC

B地点 7号土壤遺物出土狀況 W↑

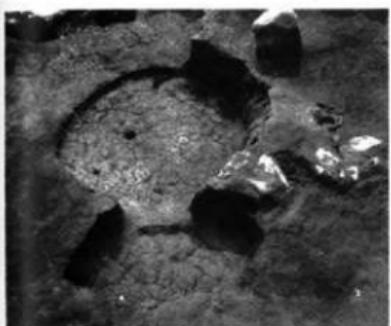


B地点 上：12号土壤  
右：26号土壤  
中：13号土壤  
下：25号土壤 W↑

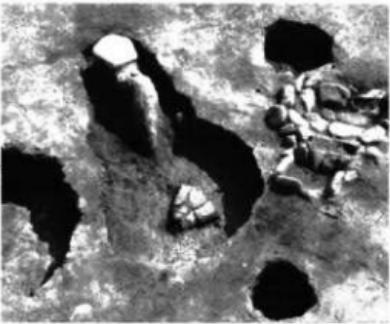




B地点 12号土壤土层断面 N↑

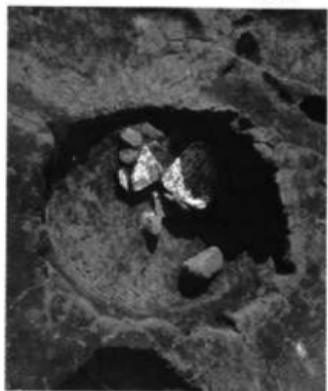


B地点 NW↑  
上：17号土壤  
下：18号土壤



B地点 22号土壤 N↑

B地点 34号土壤E↑



B地点 24号土壤W↑



B地点列石遺構北部分E↑





B 地点列石遺構北部分 W ↑



B 地点列石遺構北部分 SW ↑



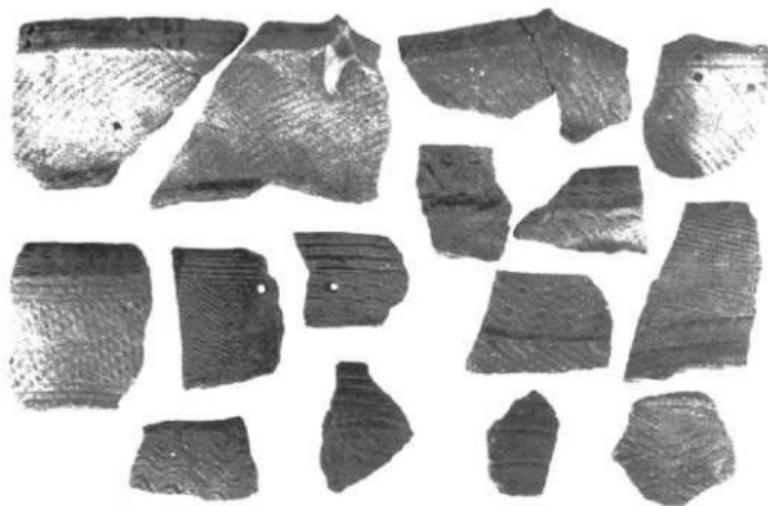
B 地点列石遺構西部分 S ↑



A地点 1号住居跡出土土器



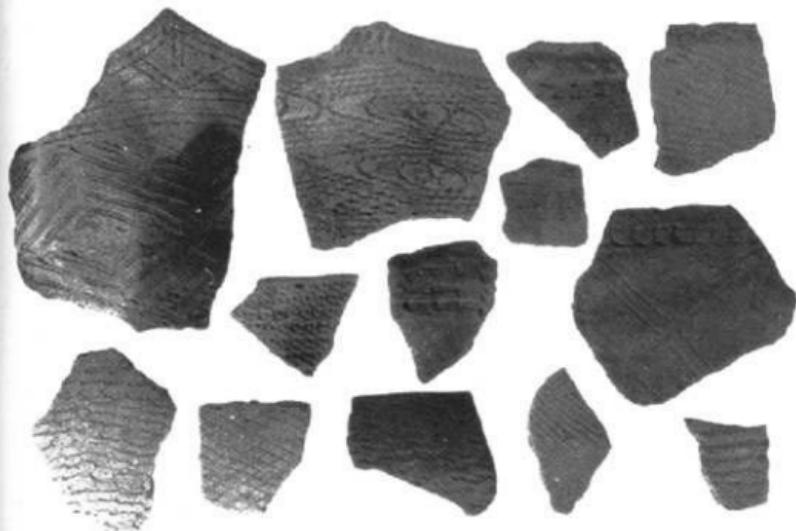
A地点 土壁出土土器(▲1号 ●2号 ▼3号)



A地点 2号住居跡出土土器



A地点 2号住居跡出土土器



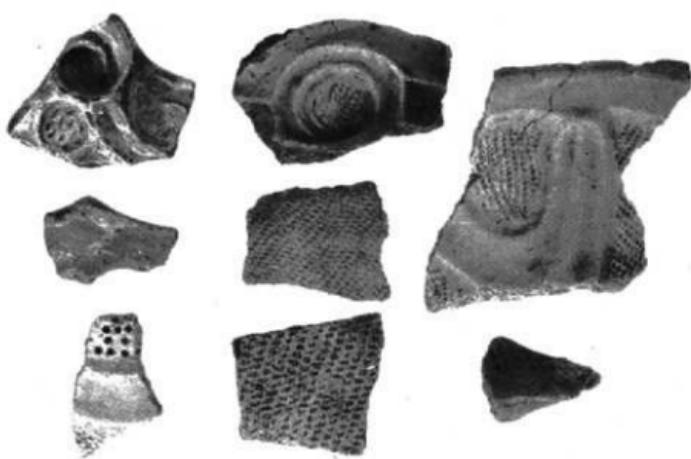
A地点 2号住居跡出土土器



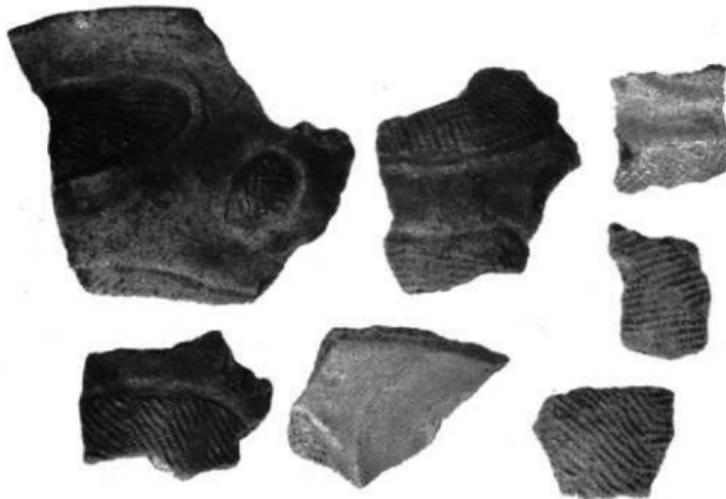
B 地點 2 号住居跡出土土器



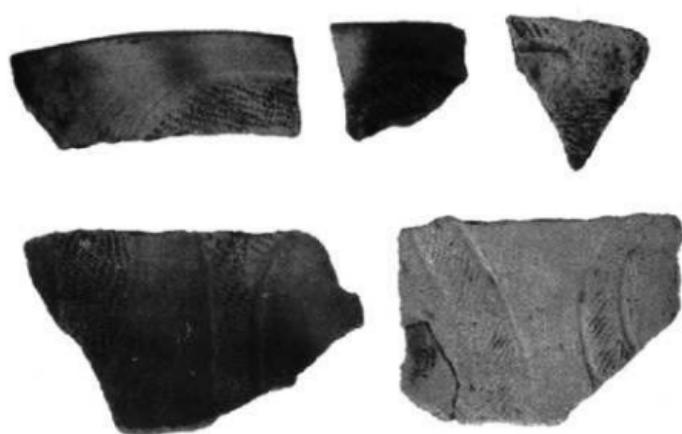
B 地點 2 号住居跡出土土器



B 地点 3 号住居跡出土土器



B 地点 3 号住居跡出土土器



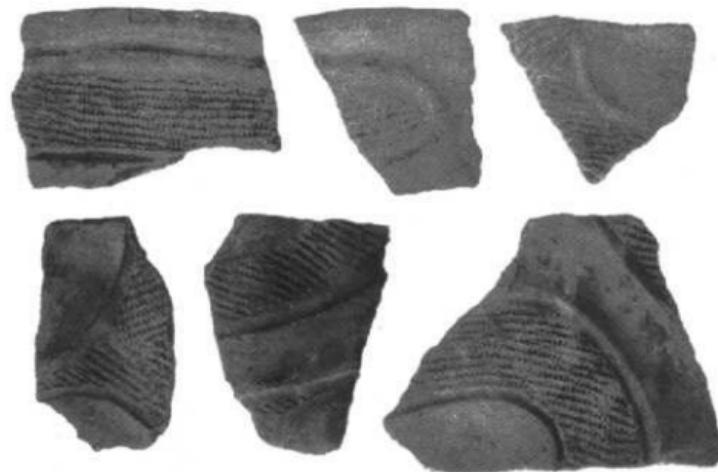
B 地点 4 号住居跡出土土器



B 地点 4 号住居跡出土土器



B地点 4号住居跡出土土器



B地点 5号住居跡出土土器



B地点 6号住居跡出土土器



B地点 6号住居跡出土土器



B地点 6号住居跡出土土器



B地点 7号住居跡出土土器



B 地點配石遺構出土土器



B 地點列石遺構出土土器



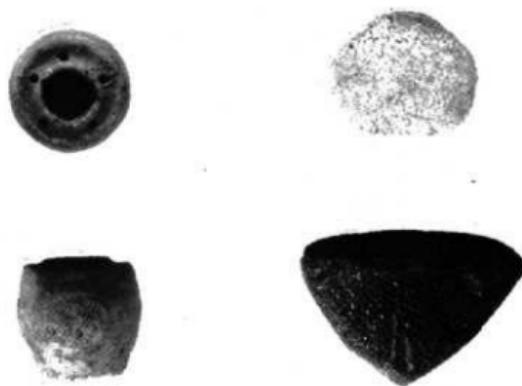
B地点 2号土壤出土土器



B地点 2号土壤出土土器



B地点 4号住居跡出土土器

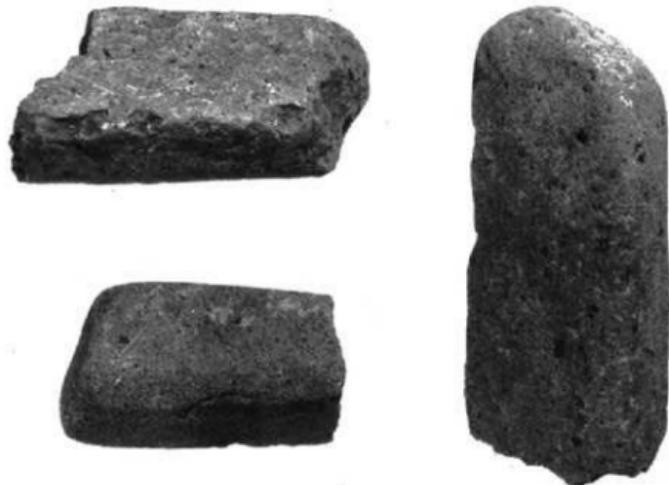


B地点配石遺構出土土器

4号住居跡出土土製品



A地点出土石器



A地点出土石器



A地点出土石器



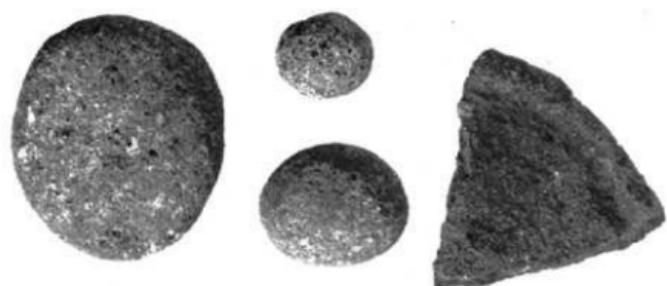
A地点出土石器



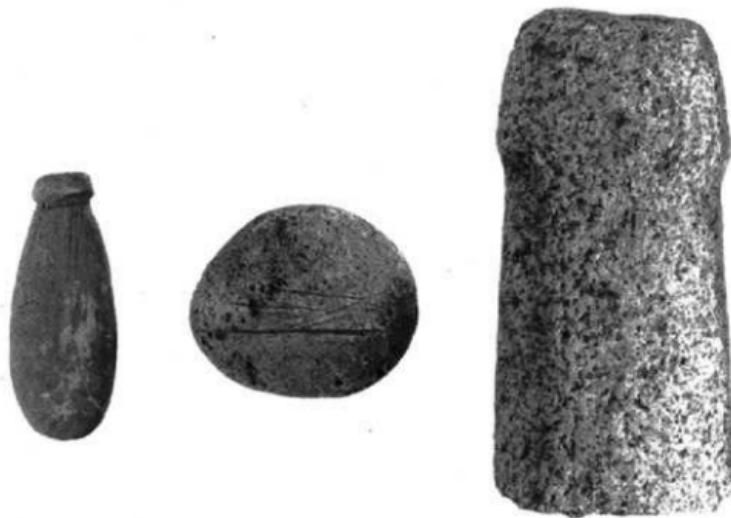
B地点出土石器



B地点出土石器



B地点出土石器



A・B地点出土石器

山形県埋蔵文化財調査報告書 第八集

## 小林遺跡

### 発掘調査報告書

昭和51年3月25日 印刷

昭和51年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 大風印刷

この調査報告書は山形県教育庁文化課の承認を受けて、  
山形県文化財保護協会が増刷頒布するものである。

山形市松波二丁目八番一号  
山形県文化財保護協会